# "ミュンヘン"へ大きな希望
## 全日本代表の健斗を讃える

「1点」の重さ、「1点」の悲哀……。

今回ほど1点の貴重さを思い知らされたことはない。

ユーゴからあと1点をとっていたら、いや失点を一つ少くしておけば日本は堂々と世界のベストエイトに進出できたであろう。そしてそのあと、四強へ勝ち残ることも夢ではなかったのだ。

村田弘監督は『1点の不足、気が狂いそうです』と口惜しさ苦悩の胸中をこう伝えて来た。

たしかに、日本の悲願は今回の世界選手権（2月26日～3月8日フランス）でも成らなかった。

ベストエイトの壁は高く厚く日本の前に立ちはだかってしまったのである。

しかし、ユーゴとの試合は勝利こそ奪えなかったが、日本ハンドボール界の明らかな前進を示すものであった。

3位の実力を誇ったユーゴと引き分けたのだから、と結果論を都合よく受けとるような安易な根拠ではない。

大会前、あらゆる関係者が優勝候補の一角にすえ、B組からの勝ちあがりに"絶対"のらく印を捺したユーゴに対して、はっきりと「勝利への策戦」をたてて臨んだ決意と自信。互角の戦況……。

ベストエイト入りを逃したことで、宿願のミュンヘン・オリンピックが一歩遠のいたのではないかという悲観が一部にあるのは大きな間違いである。

日本の成長は、なによりも本場ヨーロッパの関係者を驚ろかし賞讃のことばが限りなく寄せられた（田村団長の話）。

むしろ、国際ハンドボール界における日本の位置は、今回の代表の活躍―特にユーゴ戦―で高められ、ともすればこれまで、アジアという地域的な特殊性で別格扱いされていた感じが、今後は実力面でも評価を得ることになろう。大殊勲である。

最大関心事ともいうべき二年後のミュンヘンオリンピック出場問題はどうなるか。

国際ハンドボール連盟（IHF）は、6月の国際オリンピック委員会（IOC）総会において一九七二年の競技プログラム・要綱が最終的に議決されない限り公式な発表を一切しないと思う。

今回の上位8ヶ国の出場権獲得もそれまでは"おあずけ"である。

消息筋は、ミュンヘンのハンドボールが男子のみ16ヶ国で行われるのは確定的といい、IHF筋も当然その線で総ての計画を進めている。

世界選手権後、情報の収集にあたった田村団長（日本協会長）村田監督（日本協会選手強化対策委員長）からの連絡によると、16ヶ国で実施の場合、日本にとってかなり好条件が示されるだろうということだ。

IHFは、ミュンヘンオリンピックに関する原案を8月上旬ストックホルムで開く技術委員会でねり、その案を9月プラハで行う第13回IHF総会にかけて公表する予定のようだ。原案の原案ともいうべきものが3月7日パリで技術委員によって話し合われ、その際日本の実力がかなり高く評価された模様である。（詳報28頁）

IOC総会の終らぬ現在、楽観は許されぬが、少くとも日本の成長が理論家、ウルサ型の多いIHFの技術委員会で認められたことは大きい。

これはとりもなおさず、今回の代表チームの健斗によるもので、筆者が「大殊勲」というゆえんもここにある。

世界第10位。ベストエイト入りを逸したとはいえ、オリンピックにつながる今大会で日本は立派に所期の目的を果したといってよい。さらに言を進めるならば、ミュンヘン・オリンピックでメダルをも奪える足がかりをつかんだのだ。

白昼夢にさえ等しかった「世界選手権を我が手に」の野望が、自分たちの努力の範囲で成し遂げられる可能性が生まれでたことはすばらしい。

ユーゴ戦で泣いた「1点」は、日本ハンドボール界の世界最上位に向かうスタートの「点」になったといえる。

今後はいかにオリンピックでよい成績をあげるかが大課題となろう。「参加できた」だけでは36年ぶりに迎えたチャンスを活かすことにはなるまい。

頂点強化にあたる指導者や選手の精進もさることながら、国内の協力体制も不可欠の条件だ。

"ミュンヘン"へ。"世界"へ。ムードづくりから勝利への希望の灯を今回の代表はともしてくれたのである。（S）

「ハンドボール」4月号（第74号）目次
―世界選手権特集①―



表紙　第7回世界選手権大会　日本―アメリカ戦（於パリ、3月1日）　時事通信社提供




# ルーマニア三度目の優勝飾る

## 躍進・東ドイツは延長戦の末準優勝

## 健斗の日本、10位にくいこむ

二月二六日から三月八日まで、フランス各地で行なわれた第7回男子7人制ハンドボール選手権大会はルーマニアの一九六一年、一九六四年の優勝に続いて、三度めの優勝で幕を閉じた。

本大会予選はフランス各地において二月二六、二八日、三月一日の三日間行なわれ、4グループとも激戦が続いたが、結局、ルーマニア東ドイツ、ユーゴ、デンマーク、西ドイツ、スウェーデン、チェコ、ハンガリーの八ケ国が決勝トーナメントに進んだ。

### 日本三位のユーゴと引き分けの大激戦

一方、強化に努めた日本は予選リーグB組に出場、前回優勝のチェコには破れたが今大会三位のユーゴと大激戦を展開し引き分ける大活躍をし、世界のハンドボール界の大きな話題となった。残念ながら、勝ち点では3位のユーゴーと同率の3点をあげながら、得失点差の関係で、ユーゴーを下廻り悲願の決勝リーグ進出はならなかった。しかし、9〜12決定リーグでは、大敵ソ連には破れはしたが1961年度に行なわれた第四回大会の6位、8位であるアイスランド、フランスを連破し、よく10位の成績をあげることができた。

この大会で、従来とても日本が歯がたたないとされていたヨーロッパの一流の諸国と対等に試合できる実力が備ってきたことが、はっきりと示された。前回、前々回では善戦するのがせいいっぱいであったが、今回は明らかに勝てるところにまで実力をつけてきたことを世界のハンドボール界にはっきりと印象づけた。

## 第7回世界男子7人制選手権成績表

▼決勝
ルーマニア 13—12 東ドイツ

▼3.4位決定戦
ユーゴ 29—12 デンマーク

▼5.6位決定戦
西ドイツ 15—14 スウェーデン

▼7.8位決定戦
チェコ 21—14 ハンガリー

▼9〜12位決定リーグ

| | 勝 | 分 | 負 | 得 | 失 |
|---|---|---|---|---|---|
| ⑨ソビエト | 3 | 0 | 0 | 72 | 41 |
| ⑩日本 | 2 | 0 | 1 | 54 | 60 |
| ⑪アイスランド | 1 | 0 | 2 | 53 | 56 |
| ⑫フランス | 0 | 0 | 3 | 44 | 66 |

### 大激戦のA組、3者が2勝

#### 予選リーグ成績

| ▼A組 | 勝 | 分 | 負 | 得 | 失 |
|---|---|---|---|---|---|
| ①スウェーデン | 2 | 0 | 1 | 30 | 27 |
| ②東ドイツ | 2 | 0 | 1 | 32 | 30 |
| ③ソビエト | 2 | 0 | 1 | 33 | 33 |
| ④ノルウェー | 0 | 0 | 3 | 23 | 28 |

| ▼B組 | 勝 | 分 | 負 | 得 | 失 |
|---|---|---|---|---|---|
| ①チェコ | 3 | 0 | 0 | 58 | 33 |
| ②ユーゴ | 1 | 1 | 1 | 66 | 41 |
| ③日本 | 1 | 1 | 1 | 47 | 51 |
| ④アメリカ | 0 | 0 | 3 | 32 | 78 |

| ▼C組 | 勝 | 分 | 負 | 得 | 失 |
|---|---|---|---|---|---|
| ①西ドイツ | 3 | 0 | 0 | 41 | 36 |
| ②ルーマニア | 2 | 0 | 1 | 48 | 31 |
| ③フランス | 1 | 0 | 2 | 36 | 39 |
| ④スイス | 0 | 0 | 3 | 29 | 48 |

| ▼D組 | 勝 | 分 | 負 | 得 | 失 |
|---|---|---|---|---|---|
| ①ハンガリー | 3 | 0 | 0 | 58 | 37 |
| ②デンマーク | 2 | 0 | 1 | 61 | 53 |
| ③アイスランド | 1 | 0 | 2 | 43 | 56 |
| ④ポーランド | 0 | 0 | 3 | 43 | 59 |

### 世界男子7人制歴代順位

| | 1位 | 2位 | 3位 | 4位 | 5位 | 6位 | 7位 | 8位 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ①1938年 | ドイツ | オーストリア | スウェーデン | デンマーク | (参加4ケ国) | | | |
| ②1954年 | スウェーデン | 西ドイツ | チェコ | スイス | デンマーク | フランス | (参加6ケ国) | |
| ③1958年 | スウェーデン | チェコ | ドイツ(東西) | デンマーク | ポーランド | ノルウェー | ハンガリー | ユーゴ |
| ④1961年 | ルーマニア | チェコ | スウェーデン | ドイツ(東西) | デンマーク | アイスランド | ノルウェー | フランス |
| ⑤1964年 | ルーマニア | スウェーデン | チェコ | 西ドイツ | ソビエト | ユーゴ | デンマーク | ハンガリー |
| ⑥1967年 | チェコ | デンマーク | ルーマニア | ソビエト | スウェーデン | 西ドイツ | ユーゴ | ハンガリー |
| ⑦1970年 | ルーマニア | 東ドイツ | ユーゴ | デンマーク | 西ドイツ | スウェーデン | チェコ | ハンガリー |

ミュンヘンまで残された二年間に、この対等に近いところまできた力を、ヨーロッパ一流国よりも上の力にすることが、今後の大きな課題となろう。とにかく、一流国に勝つことは夢でなく、現実のものになっている。

成績のみから云えば、第五回大会、第六回大会の予選リーグの一勝二敗が一勝一分一敗になっただけであるが、内容的に見れば、格段の進歩が見られる。

第五回大会では、3回の予選リーグで総得点40、総失点90と得失点差マイナス50、第6回大会では総得点68、総失点89で得失点差マイナス21と得失点差では、大きなマイナスとなっていたが、今回は総得点47、総失点51になり、得失点差はマイナス4とほぼ得失点はバランスをとれるようになった。総失点が前回、前々回と比べ、約40点へったことは、今大会の前に重点的に行なった防御力の向上の成果があらわれたものと云える。

今回の4グループに別れた予選での総得点で日本は47点で6番目総失点では少ないほうから12番目となった。各グループ毎に所属しているチームが違うのであるからこれを比較すること自体ナンセンスかもしれないが、一つの傾向を知ることはできよう。

以上のように、今回のチームは技群の向上を示していることは数字の上から、はっきりしている。なお、余談になるが今大会の個人別得点の1位は31点をマークしたマキシモフ(ソビエト)、日本選手は飯田(21点)が7位、木野(20点)が8位だった。

**日本選手団**

▽団　長　田村正衛(日本協会々長)
▽監　督　村田　弘(日本協会選手強化対策委員長)
▽コーチ　竹野奉昭(兼　選　手)

▽選　手

| | | | 身長(cm) | 体重(K) |
|---|---|---|---|---|
| GK | ①下里敏彦 | 大崎電気 | 184. | 73 |
| | ⑫本田　洋 | 日　体　大 | 178. | 73 |
| FP | ②飯田誠行 | 大崎電気 | 187. | 77 |
| | ③斉藤光男 | 日　体　大 | 183. | 80 |
| | ④近森克彦 | 大崎電気 | 182. | 75 |
| | ⑤木野　実 | ワクナガ薬品 | 180. | 75 |
| | ⑥早川清孝 | ワクナガ薬品 | 180. | 70 |
| | ⑦東　一敏 | 大崎電気 | 180. | 70 |
| | ⑧藤中憲二 | 日　体　大 | 180. | 67 |
| | ⑨中井武三 | 同志社大 | 180. | 71 |
| | ⑩江名英彦 | 三　　景 | 177. | 72 |
| | ⑪竹野奉昭 | 大崎電気 | 175. | 75 |
| | ⑬近藤信行 | 大崎電気 | 170. | 63 |
| | ⑭野田　清 | 大同製鋼 | 169. | 65 |

○内数字は背番号

## 1〜4位はすべて予選リーグの二位チーム

今大会で1〜4位になったルーマニア、東ドイツ、ユーゴー、デンマークの各国はいずれも予選リーグではそれぞれのグループの2位、ルーマニアはC組で西ドイツに破れ、東ドイツはA組でスウェーデンに敗け、ユーゴーはB組でチェコに破れ、日本と引き分け、デンマークもまたD組でハンガリーに苦杯をきっしての決勝トーナメント出場であった。これらの諸国がいずれも準々決勝で、一・二点差ながら、各組の一位を破って準決勝に進出してきたことはすこぶる興味深い。もつともこれらの諸国はいずれも実力的に見れば各グループの中でも優れた力を備えていることは万人の認めるところではあるが、揃いも揃ってということになると、前代未聞のことである。

いかに各国の実力というものが接近し、その日、あるいはその試合の調子というものが、試合を左右することになるかということを示していよう。

こうした中で、安定して、すべての試合に勝ち抜くことが難事であるかが判ろう。ここらに伝統のあるチーム。それに支えられた自信の有無といったものが大きく勝敗を左右する条件になってくる。

今大会の焦点となったのは、東ドイツの大活躍である。

前回と前々回は全く不運にも、勝ち点では、十分決勝トーナメントに出る資格を持ちながら、得失点差で破れ、悲運のチームと呼ばれていた。もともと実力はもっているのだが、東ドイツは男女とも世界選手権ではついていない。女子でも、1965年の第3回大会では、優勝したハンガリーと予選で一勝一敗、得失点差は両チームとも0になり、引き分け、抽選負けをしている。本命視されていた第4回大会は流会。今度やっと男子が準優勝することになった。

## 日本の今後の課題

今後の日本の飛躍は、なんといっても場慣れと自信、そして何といっても図抜けた実力の養成にかかってこよう。第四回大会に初参加してから十余年、回を追ってチーム力は飛躍的に向上していることは明らかである。今回も〝世界の壁〟を半分つき破ることができた。次回は完全に突き破ることだ。その日のために、全ハンドボール界を挙げて、努力していかなければいけない。その日は必ずくる、近い将来に。【藤本　強】

# 日本、得失点差で8強入り逸す

## 予選リーグB組

日本の出場する予選リーグB組は前回優勝チェコ、同7位ユーゴ、アメリカ大陸代表アメリカが参加して2月26日から3月1日までフランス南西部4都市で行われた。
日本は、緒戦チェコに対して終始相手のペースにはまりこみ敗退したが、第2戦・優勝候補ユーゴとは大会史上まれにみる激戦を演じた末、引き分けた。
第3戦・アメリカは初の顔合せだったが日本の攻守が上廻り完勝した。この結果、3戦全勝のチェコを追って、日本、ユーゴが1勝1分1敗が同率に並んだ。しかし得失点差でユーゴ＝プラス25、日本＝マイナス4となりユーゴ2位、日本3位と決定、日本の決勝トーナメント（ベストエイト）進出は惜しいところで成らなかった。

## 鉄壁のチェコ守備陣
### 日本、後半の好調も実らず

日本の第1戦・チェコとの試合は2月26日午後8時30分から三千の観衆を集めたバイヨンヌ体育館で行われ、日本はスタートから激しい斗志でぶつかったが、前半10分をすぎたあとは相手のペース、後半の粘りも空しく敗れた。

チェコ 19（8—2 / 11—7）9 日本

▽審判 ヤネルスタム、ラルソン（ともにスウェーデン）

後記 村田 弘

○……バイヨンヌ市体育館の開館記念試合。弾力のすばらしいタータンコート。三千をこすファンがスタンドを埋めた。

2連勝を狙うチェコは、緒戦とあって立ちあがりからすばらしい斗志をのぞかせる。日本も一歩のおくれもない意欲充分のスタートを切った。

チェコのスタートメンバーはGKアーノースト、FPマーレス、ズーダ、ブルナー、ハブリク、ベネス、ヘルマン。前回優勝時のベストメンバー。日本にしてみれば〃鉄の壁〃という定評を誇るアーノストを要（かなめ）にした防禦陣をどう切り崩すかがポイント。

速攻、それに攻撃の安全性を保つためにボールの長時間保持から確実なシュートを狙うことにするディフェンス面では、チェコのスピードと変化、強力なシュートには身体（ボディチェックなど）で対抗、特にポスト、中央部を固める策戦をたてた。

○……前半両チームともはやい攻撃をしかけ、激しい攻防が展開された。先取点はチェコに与えたが2分同点、意気がある。

しかし、マレスの素早い動きをともなった豪快な変化シュートを主武器にしたチェコのスピーディなローリングオフェンスに次第に圧倒されはじめ点差を開かれた。

日本も、しばしば得点機をつかんだが、シュートが決まらない。

前評判以上の〃鉄の壁〃であるしかもチェコの帰陣は早く、日本の速攻をよく防ぐ。

不運もあった。バーに当ったシュートが4～5本。あと3点は加えておけた。

○……後半、チェコは巧みなメンバーチエンジで攻防のスピードがまったくおとろえない。

日本は相手の戦法になれ調子があがったが、体力の消もうがはげしく追い切れない。特にズーダの11m附近からの強烈なステップシュートをどうしても阻めなかった

結果的には10点差がついたが試合後、チェコのケニッヒ・コーチとケンパ氏（西ドイツ）がみえ、日本の善戦を讃えてくれた。点差のわりに内容は悲観すべきものではない。特にケンパ氏のいうように「ついていない」場面も多かった。ポストに当たったシュートがゴールしていれば14点はマークできたハズ。だがすべてはいいわけにすぎない。

○……敗因はスピード、体力、防禦力—特に相手GKの好技にあった。チェコが28本のシュートしか射たず、その7割近くを得点に結びつけた「確実さ」は大いに学ばねばならぬことだろう。

| | 【チェコ】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | アーノスト | 0 |
| GK | スカルバン | 0 |
| FP | クリムシク | 1 |
| FP | マレス | 5 |
| FP | ブルーナ | 1 |
| FP | カヴァン | 2 |
| FP | ズーダ | 3 |
| FP | ベネス | 2 |
| FP | クラナト | 1 |
| FP | ヘルマン | 1 |
| FP | ハブリク | 1 |
| FP | コネクニー | 2 |

| | 【日本】 | S | 得 |
|---|---|---|---|
| GK | 本田 | 0 | 0 |
| GK | 下里 | 0 | 0 |
| FP | 飯田 | 7 | 0 |
| FP | 近森 | 5 | 1 |
| FP | 木野 | 8 | 2 |
| FP | 東 | 4 | 1 |
| FP | 近藤 | 3 | 2 |
| FP | 野田 | 4 | 2 |
| FP | 早川 | 1 | 1 |
| FP | 江名 | 2 | 0 |
| FP | 藤中 | 0 | 0 |

934（2）7MT（2）S＝28, 19

## ユーゴ（3位国）と引き分けの激戦

第2戦・ユーゴとの試合は2月28日午後9時から観衆二千二百を集めたアジエンで行われた。

自信にあふれた日本は、立ちあがりこそユーゴのリードを許したが、後半は完全に相手を圧倒する攻撃を示し再三勝機を得たが、ユーゴも優勝候補らしい力で粘りともに〃最後の1点〃を奪えぬまま引き分けに終った。

日本 17（8—10 / 9—7）17 ユーゴ
引き分け

▽審判 ヘンゼル シンガー（ともに東ドイツ）

後記 村田 弘

○……日本、ユーゴともこの一戦に「ミュンヘン」がかかっていることは同じであった。

半年前、タシマイダン杯において地元でありながら18—19で敗れ

| | 【ユーゴ】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | コスティク | 0 |
| GK | ヤクセコビク | 0 |
| FP | ザグメスター | 6 |
| FP | ポポビク | 3 |
| FP | ホルバト | 0 |
| FP | ポクラヤク | 4 |
| FP | ラザレビク | 3 |
| FP | カルリク | 0 |
| FP | ミルコビク | 0 |
| FP | ラブルニク | 1 |
| FP | プリパニク | 0 |
| FP | ブガルスキー | 0 |

| | 【日本】 | S | 得 |
|---|---|---|---|
| GK | 本田 | 0 | 0 |
| GK | 下里 | 0 | 0 |
| FP | 飯田 | 8 | 3 |
| FP | 江名 | 3 | 1 |
| FP | 近藤 | 8 | 0 |
| FP | 近森 | 7 | 6 |
| FP | 野田 | 5 | 3 |
| FP | 木野 | 9 | 4 |
| FP | 竹野 | 0 | 0 |
| FP | 東 | 0 | 0 |
| FP | 早川 | 0 | 0 |
| FP | 藤中 | 0 | 0 |

1740（4）7MT（4）S＝31, 17

たユーゴは、世界の五指に入るアタッカー・ザグメスター（1ｍ91 88Ｋ）をメンバーに復帰させて背水の陣。

日本も昨夏の自信が全選手の大きな力となっており意欲にあふれた試合前であった。

チェコ戦の敗戦をいかし、失点を少くすること――そのためにボディチェックと早い動き、またシューターに対しての詰めなどを充分に注意した。

攻撃は相手の帰陣をしのぐスピード、セットでは長いキープから絶対的チャンスまで組織力を活かすこととした。

○……立ちあがりはユーゴのペース。日本は固くなりすぎ防禦、速攻にミスがでて6分には1―5と苦戦。そのあとようやく試合のリズムがもどり除々に速攻、セットとも安定、20分7―7とタイに追いついた。それぞれ相手の様子をうかがう攻防をくり返しながら日本の速攻ミス、シュートミスを活かしたユーゴは20分すぎの5分間に2ゴール差（8―10）をつけ、それが前半の点差へつながった。

○……後半、日本は前半つながらなかった攻防両面のフォロー・プレーがよくなり果敢にユーゴ陣を攻めまくったが、要所におかしたシュートミスでどうしても試合の主導権を手にすることができなかった。

特に7―7、15―15、16―16と三たびの同点のあと、日本はいずれも絶好の勝ち越し機をえながらそれを逸したのは悔み切れない。

28分16―17と窮地に立たされたが、29分気力の一投がゴールに実って引き分けへもちこんだが、まったく惜しい試合を失った。

○……後半は、すべてにユーゴを上廻り、課題のディフェンスもよかっただけに、この引き分けは惜しまれ、悔やまれる。

しかし、ベテラン近藤が8本のシュートを失敗したのをはじめここぞという時にシュートが決まらず、その他にも再三相手GKの好守にあったのは不運とともに、日本の攻撃面の新しい課題だといえよう。

ユーゴの主軸ザグメスターは意外にそのプレーに鋭さはなかったが、強肩を利した強引なプレーはパワー・ハンドボールの典型といえた。

○……それにしてもいかに「1点」が大切であるか――。

選手の頭の中は失ったワン・ゴール、攻め損じたシュートが魔のようにかけめぐった。

日本の全関係者の期待にこたえられなかった無念さにむせぶ時、各国関係者やIF首脳陣が投げかけてくれた激戦・善戦への賞讃の言葉は、冷めたい挨拶にしか聞こえなかった。

この一戦のくやしさ。次の機会にはきっとはらすことを新たな決意とした――。

（注）個人記録テーブルのうち、Sはシュート数をあらわす。

**―日本―ユーゴ―**
**―激しい得点経過―**

| | 日本 | ユーゴ |
|---|---|---|
| 前半 45秒 | | ① |
| 1分30 | | ② |
| 2分10 | | ③ |
| 4分 | ① | |
| 4分20 | | ④ |
| 5分40 | | ⑤ |
| 8分 | ② | |
| 9分 | ③ | |
| 9分35 | | ⑥ |
| 10分 | ④ | |
| 15分40 | ⑤ | |
| 16分20 | | ⑦ |
| 19分 | ⑥ | |
| 20分 | ⑦ | |
| 21分40 | | ⑧ |
| 24分 | | ⑨ |
| 24分15 | ⑧ | |
| 25分 | | ⑩ |
| 後半1分 | ⑨ | |
| 3分50 | | ⑪ |
| 10分05 | ⑩ | |
| 11分 | | ⑫ |
| 14分 | ⑪ | |
| 15分 | | ⑬ |
| 18分15 | | ⑭ |
| 19分 | ⑫ | |
| 20分 | | ⑮ |
| 20分20 | ⑬ | |
| 21分 | ⑭ | |
| 22分 | ⑮ | |
| 25分40 | | ⑯ |
| 26分15 | ⑯ | |
| 27分50 | | ⑰ |
| 28分40 | ⑰ | |

17(引き分け)17

## アメリカから1勝あげる

第3戦・アメリカとの試合は3月1日午後3時30分からツールーズに千七百の観衆を集めて行われた。

日本は立ちあがりこそ接戦したが次第に多彩な攻撃を実らせ試合の主導権を握って危気なく勝った。

日本 21（10―7 11―8）15 アメリカ

| 【アメリカ】 | | 得 |
|---|---|---|
| エデス | GK | 0 |
| B・セウテ | GK | 0 |
| ネイラー | FP | 1 |
| トリンクス | FP | 1 |
| ユラク | FP | 3 |
| ポンシク | FP | 0 |
| バークホルツ | FP | 4 |
| マツカルディ | FP | 2 |
| K・セウテン | FP | 1 |
| ダンカン | FP | 2 |
| ラバーベラ | FP | 0 |
| ウィッティ | FP | 1 |

| 【日本】 | | S | 得 |
|---|---|---|---|
| 本田 | GK | 0 | 0 |
| 下里 | GK | 0 | 0 |
| 飯田 | FP | 10 | 3 |
| 斉藤 | FP | 8 | 3 |
| 近森 | FP | 3 | 2 |
| 木野 | FP | 3 | 2 |
| 近藤 | FP | 5 | 3 |
| 野田 | FP | 8 | 2 |
| 藤中 | FP | 2 | 0 |
| 東 | FP | 5 | 3 |
| 江名 | FP | 1 | 1 |
| 竹野 | FP | 3 | 2 |
| | | 48 | 21 |

（1）7MT （2）S=30 15

▽審判 ヘンゼル、シンガー（ともに東ドイツ）

### 後記

竹野奉昭

35点差をつけ、ユーゴーよりも得失点差で上廻ろうとの意気ごみで、スタートから積極的にカット速攻にもちこもうとしたが、この積極策がウラメに出、更には選手の疲労も重なり、そこをつけこまれ、思わぬ失点をし、ベストエイト入りの野望はくじけた。かえすがえすもユーゴー戦の引き分けが惜しまれる。

## 予選リーグB組 その他の試合

ユーゴ 34（15—3 19—5）8 アメリカ
2月26日・アングレーム、観衆千二百

○……ユーゴは立ちあがりから余裕のある試合ぶりで、14分には4—0とした。

アメリカもディフエンスが立ちなおるとともにネイラー、ブラスが巧くチャンスをつかんで2—4としたが、そのあとユーゴはポクラヤク、ラザレビクらが一気の速攻を連続させて点差を開き、前半で大勢が決した。

後半もユーゴの一方的な試合。アメリカはまったく手も足も出ずユーゴは、エース・ザグメスターをベンチへさげるなど圧倒の試合ぶりだった。

▽主な得点者〔ユーゴ〕ポクラヤク5、ラザレビク8、ルブルニク5、ミルコビク5、カラリク4、ブガルスキー4〔アメリカ〕ネイラー2、ブラス2、K・セウテ2

### チェコもアメリカに楽勝

チェコ 23（13—5 10—4）9 アメリカ
2月28日、アジェン、観衆二千二百

○……ただでさえ力が違うところへチェコはベストメンバーでスタート。チェコにとっては〝調整〟の役割をはたすような試合であった。

チェコの多彩な個人技とチームプレーは前半15分で勝負のメドをつけてしまった。

アメリカは35才のベテラン・ユラクを軸に懸命な試合ぶりだったがスピード、テクニックともみおとりがし、しかも攻撃法が単調すぎた。

チェコは、マレスの華れいなフエイントプレーと、左腕ブルーナの鋭いシュートなどでしばしば〝見せ場〟をつくった。

▽主な得点者〔チェコ〕ブルーナ6、ズーダ4、クラナト3、ベネス3、クリムシク3〔アメリカ〕ベルクホルツ6、ネイラー3

# 1点争う白熱の攻防を展開
## チェコ、B組で全勝飾る

チェコ 16（8—12 8—3）15 ユーゴ
3月1日、ツールーズ 観衆千七百

### 観戦記 村田 弘

○……ともに第一の目標ベストエイト入りを決定づけ余裕があったユーゴは立ちあがり好調にチェコを攻めつけ5分3—1とリード そのままのペースで前半を終えた

ところが後半になるとチェコはガラリと戦法を変え、若手をしきりに送って彼らの強引なシュートでゴールを奪った。

ユーゴのディフエンスが組織的な動きを欠いたわずかなスキを逃さずチェコは次第に点差をつめるとともに、GKアーノストが本領を発揮、ユーゴの強シュートをことごとくさばいて13分間、ユーゴを無得点におさえたのは鮮やかであった。調子にのったチェコは15分までに連続6ゴール。14—12と逆転してしまった。ユーゴが焦って退場者を出した時、左腕・ブルナーをすかさず起用、1点をあげるなど王者にふさわしい試合運び（ベンチワーク）もみごと。

ブルナーはアキレス腱を痛め最近2年間に2回も手術、昨年11月からトレーニングをはじめ、カムバックした選手だ。

終盤になってユーゴも調子をとりもどし24分15—15。しかしチェコは28分決勝のゴールを決めてユーゴを降した。

○……後半のはじめてこそユーゴの攻防がラフになったが、そのほかはつねに1点をめぐって白熱の攻防がくりひろげられ、激しい防禦ダイナミックな攻撃、執念の強さなどすべてが勉強になった。

それに両国とも選手層が厚い。メンバーチェンジしてもチームとしての組織・力が少しも乱れないそれに選手の個性でガラリと策戦が変えられるのもうらやましい。予選リーグ最後を飾るにふさわしい力のこもった好試合だつた。

▽主な得点者〔チェコ〕コネクニ4、ベネス3 ハブリク3〔ユーゴ〕ザグメスター5、ポラヤク3

○…B組出場国メンバー…○

【チェコ】▽GKアーノスト、スカルバン▽FPクリムシク、マレス、ルコシク、カバン。ハブリクホルバス、ヘルマン、ベネス、クラナト、ズーダ、ブルーナ、コネクニイ、サトラパ、サツサク

【ユーゴ】▽GKコステイク、アルスラナジク、メルバル ▽FPプリバニク、ザグメスター、ポポビク、ホルバルト、ラブルニク、ポクラヤク、カラリク、ミルコビク、ブガルスキー、ラザレビク、ヤクセコビック クルステイク、ファフリク

【アメリカ】▽GKエデス、ゲルレイ、B・セウテ ▽FPバークホルツ、ドレーク、ダンカン、ジユラク、ラバルベラ、マツカルデイ、ネイラー、ポンシク、K・セウテ、サリン、トリンクス、ウィツカート、ウィツテイ

合 織 糸 ・ 合 織 混 紡 糸



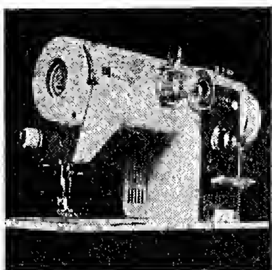
# 田村紡績株式会社

社 長 田　村　正　衛

四日市市東茂福町10－17
TEL 四日市 6—2156 (代表)
郵便番号　5 1 2



# 鍛えぬかれたフォームにこそ、メカの真髄がある



■ジューキミシンは精密工学の結晶とうたわれる高級品。シャープなスタイリングで、その名を高めています。

**ジューキ**

東京重機工業株式会社

日本のハンドボールマンが、ミュンヘン・オリンピックに夢をつないで、心から送った世界選手権ー結果は全日本チームの善戦も空しく10位という成績に終わりはしたが、予選リーグで日本が引き分けたユーゴが、三位に入いるというお添えものもあった。スポーツに三段論法は成り立ちはしないが、日本のハンドボールもりっぱに世界に通用することだけは、はっきりした。ちょうど選手権の間欧米視察のため、在パリ中だったワクナガ薬品KK専務取締役湧永儀助氏からそのユーゴ戦の観戦記がとどけられた。観客席からのユーゴ戦見たままをお伝えしよう。

○……○

## 日本対ユーゴ観戦記

# 遅かった日本の反撃

## 延長戦があれば勝てた!!

アゼンにて　湧永儀助

週末を利用して対ユーゴ一戦を観戦するため私は二十八日朝、対戦地アゼンに向け出発した。アゼンはワインの産地として知られるフランス・ボルドー地方にあり、ボルドー駅から急行で約一時間半農産物の集荷地としてもちょっと知られたところらしい。人口は約三万とのことだが、ゆうに十万人を超すかと思われるほど大きな町に見えた。活況のせいだろうか。

試合はアゼン市の中央部にある体育館で行なわれた。観客はほぼ九分の入りだったが、前の試合のチェコ対アメリカ戦が内容に乏しかったせいか、失望の色が濃いように見うけられた。その半面、次ぎの日本対ユーゴ一戦に大きな期待を寄せていたようだ。しかし下馬評は七分三分、あるいは八分二分でユーゴ優勢に固まり日本にとって面白くない前景気ではあった。それを裏付けるかのように試合前の練習でもユーゴの圧倒的な雰囲気がただよい、比較にならない長身から豪快にくり出すシュートはゴールに当たって20メートル以上もある天井にはね返えるほど私は勝敗は別として日本チームの健斗を心から念じた。

観衆は日本チームに大きなそして暖かい声援を惜しまず、特に小さい野田君に人気が集まっていた

試合は日本のスローオフで始まった。日本はよくボールをまわし最初のシュートは木野君が打ったがカットされ、逆襲にあって簡単に1点を先取された。その後連続4点をとられ4対0となったときはすでに万事休すかと思われたが7～8分ごろ飯田君が価千金のミドルシュートを決め4―1。野田君は再三、右サイドからの倒れ込みシュートを試みるが、相手が知っているせいかほとんど満足な状態でシュートできない。しかしユーゴも4点を先取した安心感からか、あるいはこの前の遠征のとき日本に引き分けている不安感からか動きがスムーズでなく、ただ力に頼ったフォーメーションを繰り返すだけ。またベンチもリードを奪っていながら妙に浮き足だち監督が立ち上ってしきりに選手にアドバイスを与えるエキサイトぶりだった。ただディフェンスは非常に堅固で長身を利した強固な防御は威圧が感じられた。またレフェリーのジャッジにしてもプッシングやホールディングに対しては非常に厳しい半面、体ごとぶつかるディフェンスには寛大であるため、体格差を利したユーゴのディフェンスは効果的だった。しかもチャージングはほとんど反則としてとられぬため、体格的にハンデーのある日本チームは苦戦を強いられたといえる。それでも日本は1点差まで追い上げ、下里君に変わったゴールキーパー本田君の活躍に観客は大声援を送り、試合はにわかに盛り上がってきた。ユーゴはさかんにメンバーチェンジを繰り返し、ポポビクのポストプレーミルコビクのパスプレーを中心に立ち上がりの点差を保持したまま10対8で前半を終わった。

ユーゴのスローオフで始まった後半も相い変らず一進一退、日本の小わざとユーゴの力強さが目立つ、観客はあらためてユーゴ強しの感を深めながらも遠来の日本チームに声援を送る。しかし点差はいっこうに縮まらず、振り出しの4点差となったときは、私たちも観客の間にも悲観の色が濃くなった。

だが、残り10分頃から日本チームはにわかに活気づいてきた。選手たちの動きが機敏になり、木野君のパスがよく通り、野田君のシュートが決まりはじめ、近藤君に代わった東君の強引なプレーがしばしば成功して日本はじりじりと追い上げていった。この日本の上げ潮ムードに観客は大喜び、そしてついに残り5分で1点差まで追い上げた。

こうなると完全に日本のペースだ。ユーゴは選手もベンチもすっかり冷静さを失い、監督がコートの片隅にまで出て、しまいに選手を激励する始末。こうしたあせりがまた反則を誘発、残り1分で日本は7メートルスローを得た。近森君が渾身の力を込めて打ったボールはゴールをかすめてゴールイン。ついに同点。すっかり熱狂した大観衆とともに私も劇的な日本の逆転を信じた。追う者追われる者、ユーゴの追いつめられた気持ちがありありとうかがわれる。もはや時間はない。

体育館全体が完全に興奮のるつぼと化した。しかし時間は容しゃなく過ぎる。ついにユーゴの攻撃中17対17で試合終了の笛が響き渡った。

延長戦があれば―誰もがそう思っただろう。もう少し早く、あの日本の爆発的な反撃が始まっていたらと惜しまれてならない。

体育館を揺るがすような大拍手がしばらく鳴りやまなかったことからも日本チームの健斗ぶりがうかがわれよう。しかし不思議にしめっぽい気持ちはなかった。いろいろなハンデを背負いながらまた遠征という不利を見事にはね返し大健斗してくれた日本チームにたった一人の日本人観客だった私も胸を張った。「ジャポン、ジャポン」を連発していつまでも日本チームの健斗を祝福する観衆をあとに私は会場をあとにした。

# —日本、ソビエトとの9位争いに敗れる—

予選リーグ各組3位の4ケ国による9～12決定リーグは3月3，4，6の3日間パリのハンドボール・パレスを主会場に行われた。

このリーグに出場したのは日本のほかソビエト，アイスランド，フランス。

大会前，優勝候補の一つに数えられていたソビエトがベストエイト入りを逸しての登場は大きな話題となった。試合は予想どおり有力とみられた日本とソビエトが，ともにアイスランド，フランスから勝ち星をあげ最終戦で9位をかけ対戦，日本は立ちあがり2点を先取したが，長身のソビエトにすぐ逆転され敗れた。日本はこれで10位に決まった。

## 9～12位決定リーグ戦

### 日本、たえず先行して制勝
### スピードに欠けるアイスランド

9位決定リーグ戦第1日は3月3日行われ日本は午後8時30分からパリ市郊外クレでアイスランド（D組3位）と対戦した。観衆二千。

日本 20（12－9, 8－10）19 アイスランド

| | 【アイスランド】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | フインボゴソン | 0 |
| | エインルソン | 0 |
| FP | ストムクルソン | 1 |
| | ブトルギンソン | 0 |
| | マグノソン | 5 |
| | S・ジョンソン | 1 |
| | シグスティンソン | 1 |
| | O・ジョンソン | 1 |
| | I・オスカーソン | 5 |
| | ハルスティンソン | 2 |
| | スバルソン | 2 |
| | A・オスカーソン | 1 |

| 得 | S | 【日本】 | |
|---|---|---|---|
| 0 | 0 | 本田 | GK |
| 0 | 0 | 下里 | |
| 3 | 14 | 飯田 | FP |
| 3 | 3 | 近森 | |
| 6 | 8 | 木野 | |
| 0 | 4 | 早川 | |
| 2 | 4 | 東 | |
| 0 | 0 | 藤中 | |
| 5 | 7 | 野田 | |
| 0 | 0 | 中井 | |
| 1 | 2 | 江名 | |
| 0 | 0 | 竹野 | |

2042（2）　7MT（2）　S＝27，19

**後記**　村田　弘

○……ベストエイト入りを逸したとはいえ各国は〝9位〟に新しいファイトをもやしてパリに集結した。パリ郊外といってもホテルからバスで2時間のところしかも館内の照明度が低くやりにくかった。

アイスランドは1m90以上の選手が4人。中でもスバルソンは1m98、91Kという大会の最長身選手。

しかし全般にスピードのあるプレーが少いことが試合前の練習でわかった。

日本はいつものようにディフェンスの強固、激しさを増して失点を少なくすることに注意、特に激しさには〝荒さ〟も加味してである。

○……よい意味の荒さ――こうゆう言葉があるかないかは別として――がなければ、ヨーロッパ諸国に対抗はできない。ナショナルチームの勝負への執着はすさまじいばかりである。

攻撃面において日本は、一応どのようなチームに対してでも18～20点をあげる自信がついて来ている。ポイントはやはり〝守りの強さ〟なのだ。

大型選手のジャンプシュートそれにアンダーシュートへの詰めの早さもこの試合ではカギとなる。

○……試合開始。なんとアイスランドは小がらな選手でスタートして来た。

日本は速攻、個人のフェイントシュートが実ってたえず主導権を握った。

アイスランドも前半なかばすぎから長身選手を送りこみ、ゴール前の豪放なローリングオフェンスとフリースローからのポイントをとって来た。

日本も木野の絶好なフットワークからのシュート、野田のプロンジョンシュートなど多彩な展開を示し観衆の声援も日本に集って好調な試合運びだった。

○……後半2度ほど5点をリードしたが、終盤、少しへばり気味となりディフェンスのフォーメーションが乱れて追いこみにあった。

しかし、たえず先行していたため余裕があり、苦しむことはなかった。

### バランスのとれた攻守
### 会心の試合ぶり示す

9位決定リーグ戦第2日は3月4日パリ・ハンドボールパレスに観衆四千を集めて行われ日本はフランス（C組）と対戦した。

日本 22（13－7, 9－6）13 フランス

| | 【フランス】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | フェリナク | 0 |
| | B・セレント | 0 |
| FP | R・リカルド | 1 |
| | M・リカルド | 1 |
| | ドリュアイス | 0 |
| | リラルジエン | 3 |
| | ゲルマイン | 1 |
| | アグーニュ | 1 |
| | エチエベリー | 2 |
| | ニタ | 1 |
| | ポルテス | 2 |
| | カリテ | 1 |

| 得 | S | 【日本】 | |
|---|---|---|---|
| 0 | 0 | 本田 | GK |
| 0 | 0 | 下里 | |
| 7 | 9 | 飯田 | FP |
| 2 | 2 | 野田 | |
| 1 | 9 | 近森 | |
| 4 | 8 | 木野 | |
| 3 | 3 | 江名 | |
| 1 | 3 | 近藤 | |
| 1 | 2 | 早川 | |
| 2 | 2 | 東 | |
| 1 | 2 | 斎藤 | |
| 0 | 2 | 竹野 | |

2242（0）　7MT（0）　S＝39，13

**後記**　村田　弘

○……開催国フランスとしては予選リーグが西ドイツ、ルーマニアの強敵にはさまれたためベストエイト入りははじめから「難しい」とし、9位リーグに全力を傾注していた。

ところが、前日ソビエトに敗れて意欲がうすらいだ感じだった。

9位をめざす日本はファイト充分。この気力の差がスコアになって表れたといってよかった。

○……スタートから日本は果敢な攻撃を展開、フランス・ディフェンスの乱れをついて着々と加点した。

守っても攻撃の好調に気をよくし、固い守りと出足のよいつぶしでフランスの攻撃を阻み、かく乱させることができた。

フランスはホームコートだけあって練習量も充分あり、予選リーグでルーマニア、西ドイツを3点差まで追いこんだ自信は相当なものがあったハズだが、ムードの高まりがなくコンビネーションがまったく整っていなかった。

個人技で攻めこみ、時おり強引

なシュートを放って来るだけでは恐しさも感じない。

○……日本は飯田、木野が当たり攻防のバランスもとれていた。特に守りの固さとまとまりがよく、「よい防禦によい攻撃あり」をいかんなく発揮した。

〃防禦が課題である〃ことは、3年前の前大会の時点からたえず我々の頭のなかにあったわけで、今大会を迎えてかなり向上したとはいえ、今度は攻防の均こうというテーマが生じて来た。その意味でこの一戦は大きな収獲といえる

# 疲れで精彩欠く日本

9位決定リーグ戦第3日は3月6日パリ・ハンドボールパレスに三千の観衆を集めて行われ、日本は9位をかけてソビエト（A組）と対戦した。

ソビエト 27（16−6, 11−6）12 日本

| | 【ソビエト】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | ウィルソン | 0 |
| | イチエンコ | 0 |
| FP | ソロムコ | 0 |
| | マキシモフ | 6 |
| | フクハカーゼ | 2 |
| | シャジュ | 2 |
| | クリモフ | 5 |
| | マショリン | 4 |
| | パノフ | 6 |
| | ズドレンコ | 1 |
| | コジュコフ | 1 |
| | シェフチェンコ | 0 |
| | 7MT (3) | S＝42, 27 |

| | 【日本】 | S | 得 |
|---|---|---|---|
| GK | 本田 | 0 | 0 |
| | 下里 | 0 | 0 |
| FP | 飯田 | 7 | 4 |
| | 木野 | 6 | 2 |
| | 野田 | 0 | 0 |
| | 早川 | 0 | 0 |
| | 中井 | 1 | 0 |
| | 東 | 3 | 1 |
| | 近藤 | 2 | 1 |
| | 藤中 | 1 | 0 |
| | 近森 | 7 | 4 |
| | 竹野 | 0 | 0 |
| | | 27 | 12 |

## 後記

村田 弘

○……2月26日の第一戦から9日目。この間すでに4都市5会場を転戦。さすがに疲れがのぞくが最終試合それも9位をかけての対戦とあって気力を振いたたせる。

一方のソビエトは大会前、優勝最有力候補にあげられていた。ヨーロッパの関係者は口を揃えて「ソビエト、ルーマニア、東独の争覇」といっていたのだ。

前回4位の面目もあり、その斗志は日本に優るとも劣らない様子が試合前からうかがえた。

○……日本はついていなかった。江名がじんましんで出場できぬところへ、野田が前半10分打撲で退場。

立ちあがりは好調で開始直後に連続ゴール、以後も対等以上に試合を進めていただけに野田の負傷は痛かった。

ソビエトはしきりと選手を交替させ、それぞれの個人技を多彩に組み合せて攻めこんで来る。巧者のなかにはさまれた長身選手の豪快なジャンプシュートやタテの突進に日本はしだいに手をやき、点差をはなされた。

○……前半で5点差。なにかはりつめた弦がプッリと切れたような動きの悪さ……。

後半、立ちなおろうとしてろうつ手段・策戦が裏目々々と出る。

大会最高得点者を狙うマキシモフを徹底したマン・ツウ・マンで追いこむと、前半あまり鋭さのなかったクリモフががぜん元気をだすといった調子だ。

日本は気力もともなわず、完敗してしまった。

○……試合を終っていくつかの反省だけが残る拙戦だった。

〃世界の壁〃を突き破るには実に多くの課題がある。

9日間6試合の日程は決してきついものではないが深夜にかかるレセプション、都市から都市への移動、そしてまったく息のぬけない一試合々々。

技術的には各国とヒケをとらぬまでに成長したと自負できる日本に立ちはだかったのは、こうした肉体的、精神的課題なのだ。

それに選手層。各国は当日の相手はもとより、次の対戦まで考えての選手起用をする。

○……日本のように一戦々々に全力を注ぎエンジン全開にも似た方法は苦しい。ベストエイトに並んだ各国は「負けてもよい試合」さえ考えて来ているのである。

予選リーグ1位が決勝トーナメントの1回戦（＝準々決勝）で揃って敗れたのは決して〃番狂せ〃ではないのだ。

10位に終った現在、すべてが弁解になり、すべてがグチに聞こえるが、少くとも日本の戦力アップは誇ってよいと思う。

しかし、今述べたような総ての面を含んだ戦力、チーム力ということになると考えなければならぬテーマは多い。

ソビエトのような技心両面の力強いハンドボールを身につけることが今後の最大課題であろう。

## アイスランドが11位 フランスは12位に終る

ソビエト 25（12−7, 13−7）14 フランス

▽主な得点者〔ソビエト〕ジャジュ7 10、マキシモフ3、パノフ3ツエレーフ3、〔フランス〕M・リカルド5

ソビエト 19（11−10, 8−5）15 アイスランド

▽個人記録不明

アイスランド 19（7−7, 12−10）17 フランス

▽主な得点者〔アイスランド〕マグヌスソン4、ハルステインセン4、〔フランス〕M・リカルド7

## 9位決定リーグ戦出場国オールメンバー（数字は身長）

【ソビエト】

| | | cm |
|---|---|---|
| GK | ウイルソン | 188 |
| | セメノワ | 181 |
| | イチエンコ | 188 |
| FP | ソロムコ | 172 |
| | マキシモフ | 187 |
| | フクハカーゼ | 171 |
| | ゼレノフ | 184 |
| | シャジュ | 174 |
| | クリモフ | 190 |
| | チエルツバーゼ | 185 |
| | マショリン | 190 |
| | パノフ | 191 |
| | ズドレンコ | 176 |
| | コジュコフ | 184 |
| | シエフチエンコ | 178 |
| | グルビス | 181 |

【アイスランド】

| | | |
|---|---|---|
| GK | ブジョエルソン | 188 |
| | H・エイナルソン | 186 |
| | フインガボソン | 179 |
| FP | S・エイナルソン | 178 |
| | シモナルソン | 182 |
| | ブジョルグビンソン | 178 |
| | E・マグヌソン | 196 |
| | S・ジョンソン | 178 |
| | シグステイソン | 178 |
| | O・ジョンソン | 190 |
| | I・オスカーソン | 190 |
| | ハルステインソン | 185 |
| | B・ジョンソン | 181 |
| | スバルソン | 198 |
| | A・オスカーソン | 178 |
| | J・マグヌソン | 187 |

【フランス】

| | | |
|---|---|---|
| GK | フエリナク | 175 |
| | B・セレント | 183 |
| | ラプラーニユ | 180 |
| FP | R・リカルド | 185 |
| | ガラント | 184 |
| | M・リカルド | 180 |
| | ドリュアイス | 183 |
| | ジェルメイン | 189 |
| | アグーニユ | 177 |
| | ニ　タ | 192 |
| | エチエベリィ | 175 |
| | A・セレント | 175 |
| | ポルテ | 179 |
| | カリテ | 175 |
| | ブルネット | 192 |
| | リラルジエ | 192 |

### 9—12位決定リーグ

| | ソ | 日 | ア | フ | P | 得 | 失 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ⑨ソビエト | … | ○ | ○ | ○ | 6 | 72 | 41 |
| ⑩日本 | ● | … | ○ | ○ | 4 | 54 | 60 |
| ⑪アイスランド | ● | ● | … | ○ | 2 | 53 | 56 |
| ⑫フランス | ● | ● | ● | … | 0 | 44 | 66 |

Pはポイント　勝＝2点

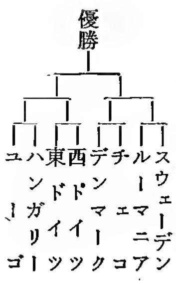
# 伯仲の実力、すべて2点内の接戦

準々決勝

## 8強激突の決勝トーナメント

2月26日から3月1日までの3日間、18都市で行われた予選リーグ4組24試合の結果、各組上位2国が決勝トーナメント（ベストエイト）へ進出、組み合せが次のように決まり3月3日から激戦を再開した。

○…決勝トーナメント組み合せ…○




### 準々決勝

### ルーマニア、前半の優位守る

○……両者は第5回大会決勝以来の宿敵。前半の4点差を追うスウェーデンの反撃に六千の観衆は大いに沸いた。

ルーマニアの反撃は快調で立ちあがりからグルイア、ガツの〝GG砲〟を中心に多彩なプレーをみせてポイント、守っても巧みなつ

ルーマニア 15（5−7 / 10−6）13 スウェーデン

| 得 | 【ルーマニア】 | | 【スウェーデン】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | ペヌ | GK | ストロエム | 0 |
| | | FP | トーマソン | 0 |
| 1 | オテリアン | 審・シュナイダー ロズマニス（西独） | アンデルセン | 6 |
| 1 | ゴラン | | ペルスソン | 3 |
| 5 | グルイア | | L・エリクソン | 1 |
| 2 | モルドバン | | カールソン | 1 |
| 0 | マリネスク | | セゲルスタット | 2 |
| 3 | ガツ | | コーク | 0 |
| 2 | キクシイド | | D・エリクソン | 0 |
| 1 | グネス | | ヤコブソン | 0 |
| 0 | ボペスク | | | |
| 15 | （2） | 7MT | （5） | 13 |

ぶしでスウェーデン得意のフォーメーションプレーを封じた。

スウェーデンは8分2−3としたが、その後は追加点があげられず、20分6−2、25分8−4と差を開かれた。

○……後半になっても両チームの攻撃リズムは変ることなく、10分ルーマニアは13−7と6点差をつけてそのまま押し切るかにみえた

ところがスウェーデンは、12分ペルスソンのゲットを口火にがぜん攻撃展開が好調子となり、ルーマニアの執ようなマークから得た7MTをアンデルセンが確実に決めるなどして追いあげ25分には12−14、29分には13−14と迫った。

○……前半の平凡な内容に失望しかけていた館内は騒然となったが、ルーマニアは29分30秒、スウェーデンの野望を砕くシュートをグルイアが決め、スウェーデンの追撃はあまりにも遅すぎた（3月3日・パリ・観衆六千）

### 前回の王者、チェコ敗る

デンマーク 18（8−9 / 10−7）16 チェコ

| 得 | 【デンマーク】 | | 【チェコ】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | K・ヨルゲンセン | GK | アーノスト | 0 |
| 0 | ピーターセン | | スカルバン | 0 |
| 0 | M・ニールセン | FP | カバン | 3 |
| 2 | A・アンデルセン | 審・ヘンゼル ジンガー（東独） | クリムシク | 0 |
| 0 | G・アンデルセン | | マレス | 2 |
| 6 | グラベルセン | | ハブリク | 1 |
| 0 | P・ニールセン | | ホルバス | 0 |
| 7 | ペーターセン | | ヘルマン | 0 |
| 2 | ハイデマン | | ベネス | 3 |
| 0 | フランドセン | | ズーダ | 1 |
| 0 | B・ヨルゲンセン | | ブルーナ | 0 |
| 1 | ルンド | | コネクニイ | 6 |
| 18 | （5） | 7MT | （3） | 16 |

チェコはスタート直後、先取点をあげ、快調な滑り出しであったが5分同点とされ、その後は17分に4−4としただけで、自己のペースで試合を進めることができなかった。デンマークはペーターセン、グラベルセンが前半各4点をあげる活躍で17分以後自己のペースにチェコを引きこみ、10−7と3点のリードで前半を終った。

後半、チェコもマレスからのパスで追いあげ、17−15の2点差に追いついたのは51分であった。

しかし、デンマークはこのあと一点を追加し、追いすがるチェコをつき放した。

前回の決勝戦の再来として、ブザンソンの体育館開館以来の大入りを記録した観衆もこの熱戦を見つめ特に後半、チェコが追いあげはじめてから大いに館内は湧いた前回の優勝国チェコは準々決勝にして早くも敗れ去った（3月3日ブザンソン、観衆三千五百）

### 激戦!!東西ドイツ延長演ず

東ドイツ 18




17 西ドイツ

かっては一緒にプレーをしたことのある両チーム。プレーは似たようなものをもっているのも当然で球史に残る大激戦を展開。

スタートはそれぞれ点をとりあい、3−3までは同点。その後西

| 【西ドイツ】 | 得 | | 【東ドイツ】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| ボーデ | 0 | GK | フリエスク | 0 |
| ラーセン | 0 | GK | プラスセエ | 0 |
| フェルドホフ | 3 | FP | ラングホフ | 6 |
| ブランド | 0 | FP | ゾルナック | 1 |
| ルブキング | 5 | FP | ロスト | 5 |
| ムンク | 2 | FP | ペッツォルド | 1 |
| ミューラー | 2 | FP | チンマーマン | 0 |
| モーラー | 1 | FP | ラント | 1 |
| ナウハウス | 0 | FP | ゲルンホフ | 3 |
| ウァーナート | 0 | FP | ゼンガー | 1 |
| シュミット | 3 | FP | ラケンマシエール | 0 |
| フインケルマン | 1 | FP | ローゼ | 0 |
| 7MT | (3) | 審・ボルレス・ドレザク（チェ） | (5) | |
| 計 | 17 | | 計 | 18 |

ドイツの選手交替のかんげきをついて、東ドイツは積極的な防御から、得点を取り、11－8で前半終了。

後半に入ると、西ドイツはラングホフ、ロストをマークする策が成功し、点差をつめ、10分には同点とした。そのあとルブキングが活躍し、一時はリードしたが、逆転され、延長に入る。

延長の前半はシュミットとラングホフが各1点。後半ペッツオルトが決めた1点が決勝点となった（3月3日・オルレアン）

### ユーゴ、辛くも逆転勝ち

ユーゴ 11（5－6, 6－4）10 ハンガリー

| 【ハンガリー】 | 得 | | 【ユーゴ】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| ホルバス | 0 | GK | アルスナジク | 0 |
| スザボ | 0 | GK | ネルバル | 0 |
| フエンヨ | 1 | FP | ザグメスター | 3 |
| マロシ | 2 | FP | ホルバト | 1 |
| バス | 1 | FP | ラブルニク | 2 |
| アドリヤン | 1 | FP | ポクラヤク | 2 |
| バルガ | 2 | FP | カラリク | 1 |
| タカクス | 1 | FP | ミルコビク | 2 |
| スチレール | 1 | FP | ポポビク | 0 |
| シモ | 1 | FP | プリバニク | 0 |
| コバクス | | FP | ブガルスキー | 0 |
| カロ | | FP | | |
| 7MT | (1) | 審・ロディール・オブデイル（デン） | (1) | |
| 計 | 10 | | 計 | 11 |

スタートはユーゴのフォーメーションプレーがきれいに決り、5分には3点の先行。しかしハンガリーはしだいにリズムに乗り、13分には同点にもちこんだが、ユーゴも2点を加点、その後はハンガリーの速攻を主体とした一方的なゲームとなり、前半は6－5。この間両チームともリズムにのった攻撃をかりるが両チームゴールキーパーのすばらしいプレーになかなか得点できなかった。

後半に入ると、ユーゴは攻め手を見つけ、後半9分には同点、またリードされた後半23分にも9－9の同点にもちこんだ。その直後にミルコビクでリードを奪ったユーゴは27分にバルガに同点にされたが、残り2分にラブルニクが決勝点をあげ辛勝した。予選リーグを苦戦の末勝ちぬいたユーゴーは準々決勝でもハンガリーに苦しみ辛くもベスト・フォア入りした（3月3日、グルノーブル）

## 決勝へルーマニアと東独

### 準決勝

東ドイツ 17（8－6, 9－7）13 ユーゴ

| 【東ドイツ】 | 得 | | 【ユーゴ】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| フランケ | 0 | GK | アルスナジク | 0 |
| フリエスク | 0 | GK | コスティク | 0 |
| ラングホフ | 1 | FP | プリバニク | 3 |
| ゼンガー | 0 | FP | ザグメスター | 5 |
| チンマーマン | 2 | FP | ポポビク | 1 |
| ラツケンマイヤー | 1 | FP | ホルバト | 0 |
| ゲルンホファ | 0 | FP | ラブルニク | 0 |
| ランド | 3 | FP | ポクラヤク | 3 |
| ペッツォルト | 0 | FP | カラリク | 1 |
| ロスト | 10 | FP | ミルコビク | 0 |
| ローゼ | 0 | FP | ブガルスキィ | 0 |
| ツオルナク | 0 | FP | ラザベリク | 0 |
| 7MT | (2) | 審・ジャメルスタン・ラルセン（スウ） | (4) | |
| 計 | 17 | | 計 | 13 |

両チームともスタートはやや堅くなり、ユーゴーが先取点をあげたのは5分であった。すぐに東ドイツは追いついた。その後はすべての面で東ドイツがユーゴを圧倒していった。特に17分をすぎる頃から、東ドイツのフォーメーションプレーが冴え、点差を拡げた。ユーゴは速攻を主体にして追いかけ8－6で前半を終了した。

後半開始早々、ユーゴーはプリバニクで1点差に追いあげたが、東ドイツは心憎いばかりのフォーメーションプレーで、得点を重ね34分には10－7と開いた。

ユーゴーの活路はザグメスターをポイントできる位置に置き、彼にボールを集めることだけになった。この作戦は前半は功を奏したが、後半は得点をとるより反撃のチャンスを与えることが多かった。

東ドイツはゆっくりしたペースで攻撃し、チャンスを確実にロストとランドにつないで点を重ねる。ユーゴは反撃とザグメスターの7MTによって、後半23分に14－12と2点差につめるのがせいいっぱいで東ドイツの洗練されたプレーにしてやられた。（3月5日、ボルドー、観衆二千五百）

ルーマニア 18（9－6, 9－6）12 デンマーク

| 【ルーマニア】 | 得 | | 【デンマーク】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| ペヌ | 0 | GK | K・ヨルゲンセン | 0 |
| ディノア | 0 | GK | モルテンセン | 0 |
| サムンギ | 2 | FP | A・アンデルセン | 2 |
| リク | 1 | FP | ガールド | 1 |
| ガツ | 2 | FP | フランドセン | 3 |
| グルイア | 8 | FP | グラベルセン | 2 |
| グネス | 3 | FP | ペーターセン | 3 |
| キクシイド | 2 | FP | ハイデマン | 1 |
| モルドバン | 0 | FP | P・ニールセン | 0 |
| オテレア | 0 | FP | G・アンデルセン | 0 |
| ニカ | 0 | FP | M・ニールセン | 0 |
| ゴラン | 0 | FP | | |
| 7MT | (0) | 審・シマノビク・バルシク（ユーゴ） | (1) | |
| 計 | 18 | | 計 | 12 |

15分までは互いにゆずらぬ戦いぶりで5—5。20分には、8—6とルーマニアが2点のリード、この時ルーマニアには一大ピンチが訪れた。グルイアとサムンギが退場させられた。ルーマニアは必死にこのピンチを乗りきった。これにはキーパー・ペヌの大活躍があった。結局前半は9—6でルーマニアがとった。

後半に入ると、ルーマニアはますます点を加える。特にグルイアの腕は冴えに冴え、どんどんシュートを決める。結局、ルーマニアは全く危気なく、グルイアの左腕を中心にした攻撃と固い守りでデンマークを破り、決勝に進出した(3月5日、リヨン、観衆六千五百)

# 80分の激斗 ルーマニアに栄冠輝やく

## 優勝戦

ワールドチャンピオンを決めるルーマニア—東ドイツ戦は3月8日午後7時からパリ・ハンドボールパレスで、スタンドを埋めつくした七千八百の大観衆に囲れて行われた。

ヨーロッパ13ケ国にテレビ中継(同時)され、文字どおり世界の耳目がこの一戦へかけられたが、両国の激突はその期待を裏切らぬ大熱戦となり、異常な興奮のもとで壮烈な試合がくりひろげられた。

前半押され気味のルーマニアは終盤、逆に有利となったが、初優勝へすさまじいばかりの執念をもやす東ドイツも追撃、決勝史上2度目の延長戦となり第一延長互角から第二延長ルーマニアがさしもの激戦に終止符をうつ快攻を示して劇的な優勝を遂げた。ルーマニアの優勝は第4回(一九六一)、第5回(一九六四)につぎ3度目東ドイツの準優勝は初。



ルーマニア—東ドイツの決勝。ボールを持つのはルーマニアのエース・グルイア選手。(仏スポーツ紙レキプから)

| ルーマニア 13 | | | | | | | 12 東ドイツ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 4 | 6 | 1 | 0 | 1 | 1 | |
| | 5 | 5 | 1 | 0 | 1 | 0 | |

| 得 | 【ルーマニア】 | | 【東ドイツ】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | ペヌ | GK | フリエスク | 0 |
| 4 | グルイア | FP | ロスト | 3 |
| 3 | グネス | FP | センガー | 2 |
| 1 | ニカ | FP | チンマーマン | 2 |
| 1 | ガツ | FP | ツォルナック | 1 |
| 0 | オテリア | FP | ガンショー | 0 |
| 0 | モルドバン | FP | ラングホフ | 0 |
| 2 | ポペスク | FP | ローズ | 0 |
| 2 | キシド | FP | プツォルド | 2 |
| 0 | サムンギ | FP | ラント | 2 |
| 0 | リク | FP | ゲルンホファー | 0 |
| 13 | (3) | 7MT | (2) | 12 |

▽反則退場【ルーマニア】ポペスク、リク、キシド、サムンギ【東ドイツ】ラングホフ、ツォルナック ▽審判 ジャネルストム、ラルソン(ともにスウェーデン)

# 興奮の大ドラマ

## 優勝戦観戦記

村田 弘

試合前から会場はおそろしいような雰囲気に包まれた。

選手紹介—ルーマニアの、いや世界のスター、グルイア(29才、1m94 89K)の人気はすばらしく、その声援で体育館が爆発しそうだった。

東ドイツの決勝進出は予想外といってもよかったが、それだけの実力は充分にある。

試合開始からルーマニアは一線防禦で相手のシューターに対して素早いピストン・マークをかけた。攻撃はダブルポストからグルイアにボールを集める策戦だ。

一方の東ドイツはスピーディなローリングオフエンスを用いたチンマーマンの軽快なフットワークからのシュート、ロストの強引なジャンプシュートで攻めた。守りの面ではグルイアを徹底的にマーク。激しい防禦陣を布いての対決はすさまじいばかりだ。

ルーマニアは攻撃に気を配りすぎたためかディフェンスが浮き足立つ場面があり10分0—3とリードを許した。しかし次第に調子と落ち着きをとりかえし26分4—4、ふり出しに戻した

その後は一進一退。後半16分ルーマニアが初めて1点のリードを奪ったが東ドイツもすぐタイ(8—8)。わずかに東ドイツ守備陣の組織力がスピード、動きでルーマニアの攻撃を上廻っている感じだったがルーマニアも強い、激しい。28分30秒ルーマニアは決勝とも思える1点をあげたが、東ドイツは29分40秒速攻で同点とした。驚異的な粘り! 勝負への執着心! 延長に入ると選手も八千の観衆も完全に興奮の極。互いに1点づつをマークしたあと試合はルーマニアが押し気味と変ったが9分45秒にルーマニア、9分50秒東ドイツとともにノーマークシュートを落として第2延長にもつれこんだ。第1延長と同じ経過で12—12。死力をつくすという言葉が正にぴったりだ。あと30秒、ルーマニアが1点を入れた。さすがの東ドイツももうだめだ。80分にわたる興奮の大ドラマが終った。

斗志。歓喜。実に力のこもったスケールの大きな試合であった。3年に一度の世界選手権、その間ためにためていた"力"のそれは爆発ともいえた……。

# ユーゴ、初の3位入賞

## デンマークに快勝

### 3・4位決定戦

ユーゴ 29（16―6、13―6）12 デンマーク

| 得 | 【ユーゴ】 | | 【デンマーク】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | アルスラナジク | GK | モルテンセン | 0 |
| 0 | メルバル | GK | K・ヨルゲンセン | 0 |
| 6 | ラザレビク | FP | ヘイドマン | 2 |
| 6 | ホルバス | FP | M・ニールセン | 1 |
| 4 | ザグメスター | FP | ピーターセン | 1 |
| 2 | ラブルニク | FP | K・アンデルセン | 3 |
| 2 | ミルコビク | FP | フランドセン | 1 |
| 4 | ポクラヤク | FP | B・ヨルゲンセン | 1 |
| 3 | ポポビク | FP | グラベルセン | 1 |
| 2 | プリバニク | FP | ガルド | 1 |
| 0 | ブガルスキー | FP | A・アンデルセン | 1 |
| 0 | カラリク | FP | | |
| 29 | （2） | 7MT | （1） | 12 |

**観戦記** 村田 弘

○……速攻と強引なシュートで得点を狙うユーゴに対し、ローリング・オフエンスを主体にポストからゴールを襲うデンマークは対称的なものであった。ユーゴは例によって「3・2・1」のディフエンスシフトをとり相手ボールをカットしては速攻でなだれこんだ。セットオフエンスからの強引なシュートも豪快に決まり「このチームとよく引き分けたものだ」という自信にも似た感がいが湧いた。

○……今日のユーゴの出来だったら優勝してもおかしくはない。特にGKアルスラナジクは豹（ひょう）の様に動きまわり6本の7MTをことごとくはばんだのは鮮やかであった。6本目の時はデンマーク選手が完全にのまれ、ボールを下に落してしまうしまつ。デンマークは要所で得た7MTの失敗から点差をつめることできず気力をそがれ、攻撃失敗のあとの帰陣も遅く精彩を欠いた。

またテクニックに頼りすぎ、ユーゴの"力"の前に屈したのも欧州球界の一断面といってもよかった。スコアこそ開いたが3位決定にふさわしい好試合で、ユーゴは初の3位入賞を快勝で飾った。（3月7日・パリハンドボールパレス観衆六千）

# 西独、接戦で5位を確保

### 5・6位決定戦

西ドイツ 15（7―6、8―8）14 スウェーデン

| 得 | 【西ドイツ】 | | 【スウェーデン】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | カター | GK | トーマソン | 0 |
| 0 | ボーデ | GK | ストロエム | 0 |
| 2 | フエルドホフ | FP | L・エリクソン | 4 |
| 1 | フインケルマン | FP | ヤコブソン | 1 |
| 1 | ムーラー | FP | コク | 0 |
| 3 | ルブキング | FP | D・エリクソン | 0 |
| 4 | ウエナート | FP | G・アンデルセン | 4 |
| 4 | シュミット | FP | カールソン | 5 |
| 0 | ブラント | FP | ネドバル | 0 |
| 0 | ウエルツ | FP | ダニエル | 0 |
| 0 | ミューラー | FP | ペルソン | 0 |
| 0 | ヌーハウス | FP | | |
| 15 | （1） | 7MT | （1） | 14 |

**観戦記** 村田 弘

○……前回（42年1月）も両国で5位を争った。この時は24―22でスウェーデン。西ドイツがルブキング、シュミットら当時の主力が健在なのに対しスウェーデンはメンバーがすっかり若返っている。しかしエースL・エリクソンをはじめ1m90台が6人もおり、予選リーグでソビエトを破ったのは今大会最大の番狂せとしてセンセーショナルに伝えられた。

○……試合は西ドイツが伝統の流れいなパスプレー、スウェーデンは恵れた体格を利したロング攻撃をそれぞれ活かし全くの互角。

勝負をかけた後半、スウェーデンは10分10―8とリードしたが、西ドイツもそれ以上ははなされずじっくり反撃の機会を待ち20分14―14と追いつき場内を騒然とさせた。こうなると老巧な西ドイツが優勢となり、逆にスウェーデンは相手の浮き足だち、52分西ドイツは相手の速攻ミスを決勝点に結びつけた。

○……西ドイツのハンドボールは教科書的で一点非のうちどころがないが、他の国に比べるといわゆるよい意味での荒さがない。そうした味が加えられない以上王座へ返り咲くことができないような感じがする。

敗れたスウェーデンは、おそらく今回のメンバーが不動のままオリンピックを迎えると想われ、有力な金メダル候補になるだろう。（3月7日・3位決定戦に同じ）

# チェコ、前半で勝負決める

### 7・8位決定戦

チェコ 21（9―10、12―4）14 ハンガリー

| 得 | 【チェコ】 | | 【ハンガリー】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| 0 | スカルバン | GK | ホルバス | 0 |
| 6 | コネクニイ | FP | シモ | 1 |
| 5 | マレス | FP | フェンヨ | 1 |
| 2 | クリムシク | FP | タカクス | 5 |
| 2 | ホルバス | FP | S・バス | 3 |
| 2 | ズーダ | FP | アドルヤン | 0 |
| 1 | ヘルマン | FP | カロ | 1 |
| 1 | ハブリク | FP | マロシ | 3 |
| 1 | ブルーナ | FP | K・バス | 0 |
| 1 | カツサク | FP | コバクス | 0 |
| 0 | サトラパ | FP | | |
| 21 | （4） | 7MT | （4） | 14 |

**観戦記** 江名英彦

○……チェコは立ちあがりから迫力あるローリングを展開、ロングシュート、ポストプレーで確実に得点を重ね、速攻もまじえてハンガリーを完全に圧倒した。

ハンガリーはゴール前のスピードを欠いたためチェコのディフェンスを崩せず、せっかくつかんだチャンスもキャッチミスやシュートミスなど凡失で実らなかった。

後半、ハンガリーはようやくオフェンスが立ち直り、スピーディな攻撃を見せ、ポストを巧く利用したフォーメーションから反撃したが、あまりにも前半の点差が大きかった。7位に終ったとはいえチェコのスケールの大きさ、選手層の厚さは目を見はらされた。（3月8日決勝の前試合）

### 5～8位決定予備戦

（準々決勝の敗者による対戦）

スウェーデン 12（5―7、7―4）11 チェコ

〔主な得点者〕▽スウェーデン、ヤコブソン6、ハルド、カールソン各2、▽チェコ、コネクニー、クリムシク各3、マレス2

西ドイツ 15（8―7、7―6）13 ハンガリ

〔主な得点者〕▽西ドイツ、ルブキング、シュミット、ミュラー各3、▽ハンガリーバルガ4、マロシ、カロ各2

# ソ連、決勝リーグ進出ならず

## 予選リーグA組

予選Aグループは東ドイツ、ソ連の決勝進出が確実視されていたが、東ドイツがスウェーデンに破れるという番狂わせがあり、スウェーデン、東ドイツ、ソ連がいずれも二勝一敗、勝ち点4となったが、ノルウェーに辛勝したソ連が得失点差でも一番劣り、ついに決勝進出がならないという大番狂わせがおこった。

これは、日本ーユーゴの引き分け試合とともに、本大会の予選リーグ最大の話題となった。ヨーロッパ各紙もソ連破るとして、センセーショナルな見出しをたてていた。

### スウェーデン実力差で押しきる

スウェーデン 8（5−2 3−4）6 ノルウェー

2月26日、キンパー、観衆一千五百

今シーズン、古豪スウェーデンに1勝をあげ、いきのあがっているノールウェーは試合前から、スウェーデンを破らんものとファイト満々試合に臨んだ。試合開始後スウェーデンは快調に得点を重ね10分には3−0と開き、順調な試合ぶりであった。一方のノールウェーは調子がでず前半は僅か2点

後半開始後、ノールウェーは調子づき、すばやい動きでスウェーデンを押した。この時得た2本の7MTもカペレンが決め、一時は5−5の同点に追いついた。しかし、スウェーデンは7−6と優位はたち、終了直前に見せたノールウェー懸命の押しこみも、終了2分前に、スウェーデンのエース・エリクソンに決められ、2点差となって万事窮した。しかしノールウェーの充実ぶりは予想以上のものがあり、A組には波乱をおこす気配が感じられた。

### 東ドイツ難敵を破り、まず一勝をあげる

東ドイツ 13（8−6 5−5）11 ソ連

2月26日、セント・ナゼール、観衆・一千九百四十五

今回の大会の栄冠の行方を左右する一戦。どちらも優勝候補の一角にあげられている両チーム。

結局、ソ連は前半の不利を後半とりかえすことができなかったのが大きな差となったのだが、なんといっても7MTを確実にものにできなかったのが、一番の敗因となった。昨今の試合では7MTがかなりあり、速攻がさして武器とならなくなっている世界の実状では、7MTをいかに確実に決めるかということはきわめて重要なポイントになっている。

ソビエトもマクシモフの大活躍で良く喰いさがったが、結局、前半の優位を生かした東ドイツに逃げこまれてしまった。この大会台風の眼になるであろうとされていた東ドイツ、緒戦から目覚しい活躍を示した。

〔主な得点者〕▽東ドイツ、ロスト、ペッオルト2、▽ソ連、マクシモフ8、マコリン2

### ノルウェー健斗示す

ソ連 10（5−4 5−5）9 ノルウェー

2月28日、レンヌ、観衆三千七百

ノルウェーはスタートから快調にとびだし、一時は2−1と有位になった。しかし、双方一人ずつの2分退場者をだしている間にソ連に抜かれ、4−3になってしまった。その後のソ連のエース、マクシモフの退場させられた間も、アレクレの一点にとどまった。一方が一点をとれば、とり返すという経過ではあったが、先手は常にソ連がとっており、ノールウェーは有位にたてなかった。

終了4分前に再度の同点になったが、それは束の間、ソ連はクリモフの好技から、ソロムコが決勝のゴールをあげ、辛勝した。

ノールウェーの充実ぶりには多くの観衆が眼を見はった。今一歩の力があったならと惜しまれる。

〔主な得点者〕▽ソ連 マクシモフ5（内7MT3）、クリモフ2 ソロムコ2、▽ノルウェー グラバー3（内7MT1）

### スウェーデン、キーパーの活躍で東ドイツを破る

スウェーデン 11（5−4 6−5）9 東ドイツ

2月28日、レンヌ、観衆三千七百

スウェーデンのこの活躍ぶりは驚きであった。いかに伝統の国とは云え、現在の力では、とても東ドイツには勝てないであろうというのが、大分の予想であった。ところが、伝統の力というのは強いこの一勝でソ連の野望は消しとびついに決勝リーグ進出をあきらめさせたという貴重な一勝であった

この一勝の要因は、キーパー・ストロエムの大活躍にあった。

前半では、ロスト、ゼンガーの強シュートを防ぎ、チンマーマンの7MTをストップし、東ドイツの得点を4点に押え、味方の有位をあくまでも保ち、後半を迎えた

後半に入っても、しばしば自チームの危機をしばしば救った。なかでも、特筆されるのは、9−8

で迎えた48分に、完全にゴールしたと思われる東ドイツ、ニーリンクのフリースローからのシュートをとめたことである。このプレー一つで、スウェーデンは見事にベストエイトに残ったといっても過言ではないファイン・プレーであった。

このストロエムのプレーは東ドイツの動きを萎縮させ、大きな勝因となった。

攻撃陣では、2本の7MTを含む5点を要所々々であげたアンダーソンとペターソンの活躍がめだった。この一勝でスウェーデンは二日目にして、2勝、得点差プラス4とまずベストエイト入りをほぼ確実にした。

## ソ連ついに及ばず

ソ　連 12（6―5／6―6）11 スウェーデン

3月1日、ナント、観衆二千八百

ソ連はこの試合どうしても勝ちしかも5点差以上で勝たないと、スウェーデンを上まわることはできないという非常に苦しい立場に追いこまれた。前日までの成績はスウェーデン2勝、得失点差プラス4ソ連は1勝1敗、得失点マイナス1と、5点の得失点差がある

ソ連はスタートからファイトいっぱいの攻撃をくりひろげ、マクシモフが先制点をあげたが、スウェーデンはすぐに追いつく、またマクシモフ、クリモフであげた得点を追いつき、20分には3―3、前半は6―5でソ連がとる。

後半に入るとスウェーデンはアンダーソン、ペタソーンで7―6と逆に有位に、ソ連もすかさず、クリモフで追いつき、7―7、その後、9―9、10―10、11―11と後半に入り、五度めの同点をくり返した後にマクシモフ、クリモフの二人であげた貴重な1点でソ連は辛勝したが、次の試合で東ドイツがノルウェーに破れるか引分けるかしない限り、決勝進出は断念せざるを得ないところに追いつめられてしまった。

〔主な得点者〕▽ソ連、マクシモフ5（内7MT3）、クリモフ3▽スウェーデン、ペターソン4、カールソン2、エリクソン2

## 東ドイツの守備力に勝利

東ドイツ 10（5―3／5―5）8 ノールウェー

3月1日、ナント、観衆二千八百

両チームとも堅くなっている。東ドイツはベストエイト入りを、ノールウェーは3位の座を確保し9～12位決定リーグに出ようとの心構えが、東ドイツは勝てば、得失点差の関係で、ベストエイト入りが決定する。ここ数度悲運のチームと云われ、予選リーグで常に貧乏くじを引きつづけた東ドイツがベストエイト入りできるかどうかに大きな興味がかかっていた。

先取点はノールウェーのアンクレ。東ドイツもすぐにロストで追いかける。3―3の同点のあとロストとペッツホルトであげた2点の有利を東ドイツがもって前半終了。

後半、ノールウェーがおいかけ5―5の同点にしたが、ここまでがせいいっぱい。東ドイツはその後連続得点を重ね、一気に10―6とつきはなした。ノールウェーも良く追ったが、堅い東ドイツの守備陣の前に破れ云った。

東ドイツの勝因の第一は堅い守備陣にある。

〔主な得点者〕▽東ドイツ、ペッツホルト4、ゼンガー2、ロスト2▽ノルウェー、アンクレ3（内7MT1）

☆　☆

このグループは予想に反し、予選リーグの最激戦区となった。各チームの力が平均し、2点以上離れた試合はひとつもなかった。ノールウェーの成長は話題の一つとなるとともにソ連の敗退は大ニュースである。ゲッター・ガンショーを第一戦で負傷欠場させながらの東ドイツは期待にたがわぬ戦いぶりを示し、スウェーデンに不覚の一敗をきっしはしたが、十分に実力のほどを示した。また今予選リーグで得点ももっとも少ない、防御力が勝った、グループとなった。このグループでは全敗はしたが、ノールウェーが成長株としてクローズアップされたことである

①スウェーデン2勝1敗（30―27）、②東ドイツ2勝1敗（32―30）以上決勝トーナメントへ、③ソ連2勝1敗（33―33）、④ノルウェー3敗（23―28）

○…A組出場国メンバー…○

【スウェーデン】▽GKストロエム、トーマスソン、ヨンソン▽FPコク、D・エリクソン、ヨハンソン、オディン、L・エリクソン、クジエル、ヤコブソンH・D・セゲルスタド、ネドバル、カールソン、ダネル、ヤンソン、アンデルセン

【東ドイツ】▽GKフランケ、フリエスク、プルーゼ、▽FPガンショウ、ラングホフ、ゼンガー、チンマーマン、ラケンマシエール、ゲルンホフエール、ラント、ペッツオルト、ロスト、ローズ、ルッオナクヤンスホファー、ネイリング

【ソビエト】別掲（11頁）

【ノルウェー】▽GKキレルド、バイエ、グリベン▽FPグラベル、バエク、クバルハイム、ウルダル、ハンセン、レイナートセンウスバーグ、ティルダル、グラフワン、カプレン、ベルベン、アンクレ、ナブセス

※予選リーグB組は4・5頁参照

# ルーマニア、西ドイツに敗れる

## 予選リーグC組

Cグループでは、予想通り、西ドイツ、ルーマニアが決勝に進出したが、最終日ルーマニアが西ドイツに破れる大波乱があつた。この大会快調なルーマニアと不調の西ドイツ、勝敗は決定してそうなものなのだが、決勝トーナメント進出を決めた気のゆる味がでたのか、ルーマニアは西ドイツに破れて、予選リーグ第一位の座を西ドイツにゆずつた。

あとは順当な勝負のグループであつた。

### ホスト国フランスの健斗に賞讃の声

ルーマニア 12（7－2、5－7）9 フランス

2月26日、パリ、観衆4千。

今大会のホスト国、フランスは今大会を控え、強化につとめた。その効果が現われ、今回優勝候補の筆頭にあげられていたルーマニアに好試合をし、集った多くの観衆を湧かせた。

この試合、両チームとも、初試合なので堅くなったのか、スタートは不調。両チームが1点ずつとりあったのは11分をすぎてからであった。

その後、ルーマニアはやや堅さがほぐれ、着々と加点したのに対し、フランスは一向に点が増えずグルイアをはじめとするルーマニアの強打の前に何らなすところがなく、7－1の大差がついてしまった、集った観衆も、フランスの試合ぶりに失望を感じていた。

後半に入ると、フランスは良くグルイアをマークし、ルーマニアの加点を最少限に押え、攻めては着々とゴールをあげた。11－7（43分）になり、やっと観衆は湧きはじめ、盛んに声援を送るが、前半の失点はあまりに大きかった。

〔主な得点者〕▽ルーマニア、グルイア5、キシド3、モルドバン7MT2、リス2。▽フランス M・リキャール2、ジェルメイン2、R・リキャール1。

### 西ドイツ、スイスに辛勝

西ドイツ 11（7－3、4－7）10 スイス

2月26日、ルーエン、観衆七百五十。

西ドイツは実に危い橋渡りをした。前半は西ドイツ、後半はスイスという試合であったが、僅差で西ドイツに軍配があかった。

今シーズンの西ドイツはミュンヘンを第一目標にして、メンバーの入れ替えをはかったが、若手とベテランの間がしっくりいかず、更には左腕ムンクの負傷もあり、もう一つの力が見られない。

それでも前半は快調に得点を重ね、順当な勝負をしていたが、後半に入ると、スイスの防御陣の術中に入り、得点がとれない。こうなると自らの防禦もチグハグになり、スイスにどんどん追いあげられる。スイスは要所で得る7MTをルドルフが着実に決め、55分には11－10と1点差に追いあげたがその後両チームとも得点なく、ついに西ドイツの逃げきりを許してしまった。

〔主な得点者〕▽西ドイツ、モラー3、ルブキング3（内7MT1）▽スイス、ルドルフ5（内7MT4）、ギガク2（内7MT1）、ノッター2（7MT1）

### ルーマニア、スイスを大差で破る

ルーマニア 22（9－6、13－1）7 スイス

2月28日、アミエン、観衆一千七百。

スイスは快調に、一昨日の西ドイツ戦の後半を思わすスタートでルーマニアに一歩もひけをとらない試合ぶりで前半25分を終了したここまでのスイスチームは、攻防とも申し分なく、守ってはルーマニアの動きを封じ、攻めてもルーマニアの守備陣をよくゆさぶり、加点し、6－6の同点というすこぶる順調な試合ぶりであった。

前半の残りの4分、ルーマニアは実にすばやく、力をもって動きまたたく間に点を連取してしまった。

この間のルーマニアの戦いぶりはめざましいものがあり、さすが優勝候補の筆頭と思わせるものがあった。

後半に入っても、ルーマニアのこの試合ぶりは変らず、グルイアガツ、オテレア、ポペスクらがスイス守備陣の上からと着々と加えをした。

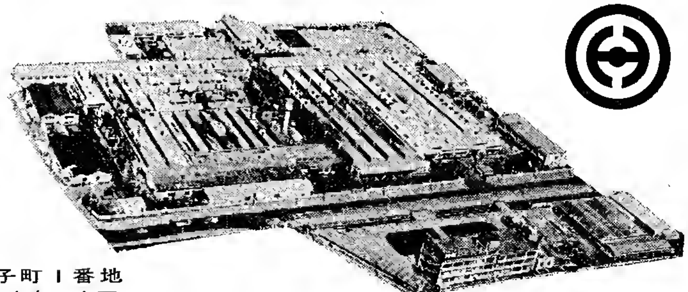
スイスは防戦一方に押われ、前半に見せた動きは影をひそめ、ルーマニアの鉄壁の守備陣の前に何らなすとこなく、僅か一点を挙げたにとどまった。ルーマニアは40分からグルイアをベンチにさげるなど余裕のあるところを見せ、完勝し、得失点差を大きく拡げることに成功した。

〔主な得点者〕▽ルーマニア、グルイア4、ガツ4、モルドバン3（内7MT1）、ポペスク3、オテレア3。▽スイス サンチニ3、ルドルフク3（内7MT1）

### 西ドイツ、フランスにまずは楽勝

西ドイツ 15（10－6、5－6）12 フランス







2月28日、エブロー、観衆一千八百。

フランスの準決勝進出の夢はついえた。1970年のこの大会のホスト国として、強化につとめていたフランスではあったが、西ドイツ、ルーマニアに善戦しながら連敗し、ついにベスト・エイト入りは果せなかった。

フランスは1－1の同点から、一時は（6分）2－1とリードしたが、8分に2－2の同点とされた後はついにリードする機会がもてなかった。

西ドイツはスタートこそ不調であったが、しだいに調子をあげ、8分同点にしたあとは着々と得点を重ね、前半終了時には10－6と4点差をつけた。

後半に入り、フランスは一生懸命に追ったが、西ドイツも得点をし、結局3点差以上にはならなかった。

〔主な得点者〕▽西ドイツ、ミュラー4、ルブキング3（内7MT2）、シュミット3、モラー2。▽フランス、アゴーネ2（内7MT1）、ニタ2（内7MT1）、ドルア2、ギャラン2。

## フランス、順調に スイスを破る

3月1日、カエン、観衆三千八百。

フランス 15（7－3 8－9）12 スイス

この試合に9－12位決定戦をかける両チーム。スタートから順調にフランスは加点していき、スイスに同点のチャンスを全く与えずに押しきった。

この試合に関してはフランスは全く危気のない試合ぶりであった前の二試合いずれも、後半追いかけ、追いつかなかったフランス。この試合は当初より快調にとばし前半で4点のリード。

後半に入っても、攻撃の手をゆるめず、43分には5点差をつけたスイスは後半終了直前5分前からたて続けに4点をあげ、猛烈な追いこみを見せたが及ばなかった。フランスはこの一勝で何とかホスト国としての面目を保った。

〔主な得点者〕▽フランス M・リキャール5（内7MT3）、エチエベリー3、A・セルネ3、R・リキャール2、ギャラン2 ▽スイス、ノター5（内7MT4）、ギガフ3、

## 西ドイツ、ルーマニアを破る

西ドイツ 15（9－5 6－9）14 ルーマニア

3月1日、カエン、観衆三千八百。

この大会不調の西ドイツがルーマニアを破った。といっても、両チームとも決勝トーナメント進出は決定しており、この大会の中では、一番気の抜くことのできる試合でもあった。

西ドイツは前半有利に戦いを進め、9－5とリード。一方ルーマニアは、後半開始直後に得た7MTを足がかりにして、40分には、10－10の同点にした。この辺のルーマニアの力はさすがと思わせるものがあった。

その後も一進一退を続け、46分には、12－12、51分には14－14と再三同点にもつれこんだ。

その後両チームともチャンスを逃がし、得点がなかった。

59分に西ドイツには願ってもないチャンスが到来した。

7MTである。これをフィンケルマンが見事に決め、そのまま試合は終った。貴重な一投と云うべきであろう。

この大会不調であった西ドイツの唯一の輝やかしい試合であったもっとも先に述べたように、この試合、ルーマニアにとっては調整のようなもので、もう一つ熱が入らないものであったことも否めない。

× ×

結局Cグループは誠に順当な結果におわった。予想通り、決勝トーナメントに西ドイツ、ルーマニアが進み、3位にホスト国フランス、まさに予想通りの結果となった。話題といえばルーマニアが西ドイツに破れたことだろうが、これとても両チームともピリッとしたもののない試合なのだから、どうということもない。ルーマニアというよりはグルイアの活躍が、このグループのみものであったといえる。

①西ドイツ3勝（41－36）、②ルーマニア2勝1敗（48－31）、以上決勝リーグへ③フランス1勝2敗（36－39）、④スイス3敗（29－48）。

### ○…C組出場国メンバー…○

〔西ドイツ〕▽GKボーデ、ラスゲン、カーター ▽FPウェルツブランド、ブシェール、フエルドホフ、フィンケルマン、ムンク、ルブキング、モーラー、ミューラー、ニュウハウス、ロッジ、シュミット、ウェナート。

〔ルーマニア〕▽GKペヌ、ディンカ、オルバン、▽FP キシドサムンギ、リク、ニカ、ポペスク、ガツ、オテリア、モルドバン、グルイア、マリネスク、ゴラン、グネス、バートロム。

〔フランス〕別掲（11頁）

〔スイス〕▽GKファンク、エイセン、キーネル ▽FPダブス、ブラセール、グルンドマン、ギガスクロン、モーレル、メイヤー、モルエル、ノッター、ルドルフ、サンティーニ、シュウェイングルーバー、プラットナー

# デンマーク、ハンガリー ベストエイト入り

## 予選リーグD組

もっとも混戦の予想されたグループではあったが、ポーランドが意外に元気なく、あっさり、デンマーク、ハンガリーがベストエイト入りを果した。ポーランドは大会前は相当の調子をあげ、アイスランドとともにD組に波乱をまきおこすことが予想されていたが、いざ大会が始まると伝統の力に気押されてか、全く振わず、敗退してしまった。予選リーグの間はハンガリーがきわめて快調にとばして、一位で決勝トーナメントに進出を決めた。

### デンマークが楽勝

デンマーク 23（13—6 / 10—10）16 ポーランド

2月26日、ロングウィー、観衆一千八百

今シーズン成長が伝えられていたポーランド、大会前の各種の大会では好成績をあげていたが、本大会になると、スタートが大きくものを云う。とくにDグループのような波乱含みのところではなおさらである。

ポーランドのスタートは決っして悪くはなかった。前半は五回同点にし、よくデンマークを追っていたが、前半中途から、デンマークの攻撃が適確にきまり、それに反し、ポーランドの調子はくだりはじめた。それになお拍車をかけたのが、20分を過ぎてからデンマークに与えられた7MTである。これをデンマークは決め、自軍を優位に導いた。

後半に入るとデンマークは増々快調にグラバーセンとペターセンが決め、点を加えた。一方、ポーランドは前半の不調から抜けられず、得点をかえしたが、かえって点差は拡がるばかりであった。

デンマークはこの一勝で調子づき、逆にポーランドは予選リーグ中調子が出ずに消え去った。

〔主な得点者〕▽デンマーク、グラバーセン11（内7MT5）、ペターセン4

▽ポーランド、レウュ4、スツオルス3、ザワデ3（内7MT2）メンガー3

### ハンガリー前半で勝負を決める

ハンガリ 19（9—3 / 10—6）9 アイスランド

2月26日、ムルハウゼ、観衆三千

成長が伝えられるアイスランドはこの試合どのような成果を示すかに興味は集った。

スタートは互格であったが、15分を過ぎるころから、ハンガリーの精密多彩な攻撃が稔りはじめ、一方的な経過となった。

それまでは、ハンガリーはいたずらにボールを廻すだけで、何らそれらしい攻撃をしかけることができなかった。

しかし、ハンガリーの正確な機械が回転しだしてからは早く、前半は9—3と一方的な試合になった。

後半、アイスランドは反撃を試み、この試みはやや成功はするが、ハンガリーは名手マロシをもち、その多彩なリードで増々点差を拡げ、危気なく大差をつけてしまった。

〔主な得点者〕▽ハンガリー、タカクス4、カロ3、バルガ3、バス3

▽アイスランド、オスカルソン3、ハルスタインソン2

### デンマーク2勝あげる

デンマーク 19（9—6 / 10—7）13 アイスランド

2月28日、ハゴダンジエ、観衆一千二百

スタートはデンマークの楽勝を思わせた。7分には、4—1、23分には8—3と点差を開き、デンマークが大勝する試合運びとなった。

ところが、アイスランドは超サイドから、シュートをうち、これがヨルゲルセンに対して、良く決った。点差は縮まる。デンマークはいささか慌て、驚いた。しかしそこは古豪・デンマーク、すぐに守備をたてなおし、攻撃も、ペーターセンが良く決め、ピンチを脱し、そのまま押じきり、2勝をあげた。

慌てながらも、良く体制をたてなおし、勝利を握るというのはやはり、伝統の力によるものであろう。デンマークは2勝をあげ、ベストエイト入りを確実にした。

〔主な得点者〕▽デンマーク、グラバーセン6（内7MT3）、ハイデアン5、J・ペーターセン4、A・アンデルセン3、ニールセン3

▽アイスランド、ハルスタインソン5、O・ヨンソン3、J・マグヌソン3（内7MT2）、スバパルソン2

### ポーランド、後半に力つく

ハンガリ 15（4—4 / 11—5）9 ポーランド

2月28日、ストラスブール、観衆一千

最終的には6点の差がついたがハンガリーにとっては薄氷を踏む思いの勝利であった。

前半は調子がでず、互いに点のとれない試合で、4－4で終る。

後半に入っても、どちらかが1点とればすぐに追いつくという経過で時がすぎ、49分には、9－9これを境にポーランドの得点がピタリととまったのになし、ハンガリーは盛んに得点をとりはじめる。10分間に6点という得点をたたきだした。

ポーランドの善戦は守備陣がよかったこと、特に1M96の身長をもつGK・スジムカジクがハンガリーのシュートをよく防いだことにあるが、それを上廻る動きをし、ハンガリーに勝利をもたらしたのはマロシの動きである。彼の作り出したチャンスでハンガリーは勝利を握った。ハンガリーチームのなかできわだった動きをするだけでなく、今大会を通じての彼の動きは第一級の絶品であった。

〔主な得点者〕▽ハンガリー、カロ2、バス2、シモ3、タカクス3、スティラー2
▽ポーランド、メルサー2、レシュ2

## アイスランド作戦勝ち

アイスランド 21 (14－9 / 7－9) 18 ポーランド

3月1日、メッツ、観衆二千五百

アイスランドは三位の座を作戦にかけた。どちらも二敗ずつして決勝トーナメントには出られないことになっている。

アイスランドは前半、ポーランドの得意のフォーメーションプレーをつぶす作戦に、これが図に当り、多くのポーランドの守備の破綻を作りだすことができ、このスキから、14点をもぎとった。

後半、ポーランドはこれに気づき、守備体形を整えたが、すでに遅く、ポーランドは作戦負けをしてしまった。

これは問題なく、アイスランドの作戦勝ちと云える。

期待されながら、ポーランドはついに9～12位決定戦にも姿を見せず、消えることになった。

〔主な得点者〕▽アイスランド、ハルスタインソン5、O・ヨンソン4、J・マグヌソン4（内7MT1）
▽ポーランド、ザワダ4（内7MT2）、ピエカレク4、デイボル4

## ハンガリーはマロシによって大量得点に

ハンガリー 24 (13－8 / 11－11) 19 デンマーク

3月1日、メッツ、観衆二千五百

両チームとも決勝トーナメント進出は28日に失っており、すこぶる楽な戦い。デンマークは決勝トーナメントに備えて、他のグループのてい察に、守備の要・GK・ヨルゲッセン、攻撃の中心、J・ペーターセン、ハイデマンの3人を派遣している。

良くいえば用意周到、悪くいえば、この試合を捨てるという形である。これは西ドイツ・ルーマニア戦にも見られた。

20分までは、一進一退で7－7の同点、このあとハンガリーは例によって、マロシからの攻撃が火を吹き、またたく間に6点連取し29分には13－7と差をつけた。

後半も同様な一進一退であったが、ハンガリーはベンチにいたメンバーを次々に繰りだして試合をさせてみるという全く、どうでも良いような形の試合になってしまった。

〔主な得点者〕▽ハンガリー、コバクス5、カロ4、マロシ4、タカクス4、バセ4
▽デンマーク、M・ニールセン6P・ニールセン3（内7MT2）ルンド3

☆　☆

結局、伝統にのった二チームが混戦をきりぬけた形になったが、第一試合の結果次第では、どのように変ってきたかは全く予断を許さない。実力的にみた最激戦区も結果は一見順当におわったというところ。

①ハンガリー3勝（58－37）、②デンマーク2勝1敗（61－53）③アイスランド1勝2敗（43－56）④ポーランド3敗（43－59）

## ○…D組出場国メンバー…○

【ハンガリー】▽GKスザボ、ホルバス、バルタロス ▽FPコバクス、カロ、フエンヨ、マロシ、S・バス、シモ、アドリヤン、スザボ、バルガ、タカクス、スティレール、クシク、K・バス

【デンマーク】▽GKK・ヨルゲンセン、モルテンセン、L・ピーターセン ▽FP A・アンデルセン、G・アンデルセン、K・アンデルセン、ガルド、フランドセン、グラベルセン、ヘイドマン、B・ヨルゲンセン、ルンド、P・ニールセン、J・ペーターセン、スブンドセン、ニールセン

【アイスランド】別掲（11頁）

【ポーランド】▽GKコワルクジク、スジイブカ、スジムカジク
▽FP スゾルク、ザワダ、ノワコウスキー、メルセル、ピーカレク、レク、クチター、ピオトロウスキー、プニオシンスキー、ザワジンスキー、デイボル、ドデーラソコロウスキー、

本誌ではミュンヘン・オリンピックを控え、各国の戦力などをつぶさにお伝えするため今月号(74号)、来月号（75号）を「第7回世界男子7人制選手権特集号」といたします。

# 親善試合

☆デンマーク　3試合　2分1敗

☆西ドイツ　2試合　2勝

☆オランダ　3試合　3勝

☆イタリア　1試合　1勝

☆イスラエル　2試合　1勝1分

## デンマーク

### ユースナショナルと引き分く

遠征第1戦は2月16日フレデリシアでデンマーク・ユースナショナルと行われた。（観衆二千）

日本 17（7−8, 10−9）17 デンマーク・ユースナショナル

| | 【デンマーク】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | アルンマルク | 0 |
| GK | ラウリトセン | 0 |
| FP | アンデルセン | 0 |
| FP | ベルントセン | 0 |
| FP | ハンセン | 6 |
| FP | F・ラウセン | 8 |
| FP | P・ラウセン | 0 |
| FP | ムンカゲル | 0 |
| FP | アウラー | 1 |
| FP | シュレール | 1 |
| FP | サーレンセン | 1 |
| FP | ソーレンセン | 0 |
| | | 17 |

| | 【日本】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | 下里 | 0 |
| GK | 本田 | 0 |
| FP | 飯田 | 3 |
| FP | 近森 | 2 |
| FP | 木野 | 3 |
| FP | 東 | 4 |
| FP | 近藤 | 1 |
| FP | 野田 | 3 |
| FP | 江名 | 0 |
| FP | 竹野 | 0 |
| FP | 早川 | 0 |
| FP | 藤中 | 1 |
| | | 17 |

【後記】離日後20時間とあってコンディションはよくない。外国チームと久々の対戦とあって相手のリズムをつかめるか心配されたが滑り出しは好調、7分3−0とした。

しかしその後は思うように加点できずディフエンスミスから相手のペースとなり苦戦となったが後半29分辛くも同点に追いつけた、体調を考えボール保持時間を長くし、シュートの確率を狙ったがGKの美技にあって7本のノーマークを逸したのがひびいた。

防禦面では相手の強引なポストプレーとサイドへの突入に対し当りが遅く、しかも腕をひっかけたプレーをすべて7MTにとられたのも痛かった。実に11本。そのうち7本を決められた。

会場はハンドボールコート3面がとれるすばらしいもの。外気はマイナス10度、館内10度。（村田）

### 第2戦も互格に終る

遠征第2戦は2月17日オーハスのYMCA体育館でKFUM・オーハスと行われた（観衆千五百）

日本 21（12−11, 9−10）21 KFUM・オーハス

| | 【KFUM】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | クリタガルド | 0 |
| GK | ステフェン | 0 |
| FP | カアエ | 11 |
| FP | ザンドフ | 1 |
| FP | ボドスガルド | 4 |
| FP | エーレリッヒ | 0 |
| FP | ニールセン | 4 |
| FP | リイダル | 0 |
| FP | ディドナク | 0 |
| FP | モレール | 1 |
| | | 21 |

| | 【日本】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | 本田 | 0 |
| GK | 下里 | 0 |
| FP | 飯田 | 5 |
| FP | 野田 | 3 |
| FP | 近藤 | 3 |
| FP | 木野 | 5 |
| FP | 早川 | 0 |
| FP | 東 | 1 |
| FP | 江名 | 2 |
| FP | 斎藤 | 0 |
| FP | 藤中 | 0 |
| FP | 近森 | 2 |
| | | 21 |

【後記】KFUMはデンマーク一部リーグで5年連続準優勝したチーム（注・1位は有名なHG・コペンハーゲン）。主力の5人はいずれも185センチ以上だ。

日本はいぜん体調が不充分で特に疲れが目立つ。目標は20得点。16失点。

前日わるかった速攻のフォロープレー、シュートミスを少なくするの二点と、守りではボディ・チェックを強くし、特に相手のポストプレーを阻むよう指示した。

しかしKFUMのポストプレーは実に巧く、トリッキーな攻撃にもまどわされて、またしても11本の7MTをとられるしまつ。これが今日もひびいた。

激しい当りと攻撃にまさる防禦のないことを再認識。攻撃面ではリズムをとりもどし、クイックプレーも出はじめて上向きだったが後半5分14−11、18分18−15とはなしたあとに二度とも8分間ノーゴールというスランプがあり、その間にポイントを取り返されたのは拙い。26分19−19から先手をとられ危かったが、28分以後2点をあげて引き分けに持ちこんだ。

（村田）

### 強引なシュートに押さる

#### 3戦で30本の7MT

遠征第3戦は2月19日ニコビングでスタディオン・コペンハーゲンを主力にした地元選抜軍（LFHF）と行った。（観衆千五百）

ニコビング選抜 18（9−9, 9−8）17 日本

| | 【LFHF】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | ※ピーターセン | 0 |
| GK | ソンメル | 0 |
| FP | リスガルド | 0 |
| FP | キスカ | 4 |
| FP | シーレル | 4 |
| FP | ※フランドセン | 1 |
| FP | ユルゲンス | 1 |
| FP | ※ヨルゲルセン | 1 |
| FP | ※M・ニールセン | 6 |
| FP | ロスムセン | 1 |
| FP | ラルセン | 0 |
| | | 18 |

| | 【日本】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | 本田 | 0 |
| GK | 下里 | 0 |
| FP | 近森 | 6 |
| FP | 江名 | 0 |
| FP | 早川 | 0 |
| FP | 近藤 | 3 |
| FP | 野田 | 3 |
| FP | 木野 | 3 |
| FP | 飯田 | 2 |
| FP | 藤中 | 0 |
| FP | 東 | 0 |
| FP | 斎藤 | 0 |
| | | 17 |

【後記】LFHFの主力はデンマークの世界選手権代表4人（メンバー中※印）で、GKピーターセンは欧州屈指の選手。このほか元ナショナルが4人おり非常に手強い布陣であった。

日本は守りで中央部を強力にし相手のポストプレーをなんとかおさえる策戦に出た。立ちあがりは好調で5分3−0としたが、その後はGKのたてつづけの美技にあって加点できず、選手たちもいささか気遅れ気味。ノーマークまで落とす拙攻で、相手の追撃を許した。

後半3分、相手の反則退場という絶好機にゲットできなかったのも結果的には一つの敗因となった。

経過は一進一退。いちどは12−10としたが、7MTをふくむ連続4ゴールされるなどあって24分13−17と逆転を許した。

25分を過ぎてからは再び日本のペースとなり59分17−17に追いついたが、終了5秒前、強引なシュートを決められ涙をのんだ。

結局は日本選手はまだまだシュート力が弱いという印象でこの面の強化を痛感した。この日も7MTを8本もとられた。デンマーク3戦で30本の7MTを課せられたことになる。審判の判定にも首をかしげられる面もあったが、いずれにせよ防禦面での研究課題ではある。

デンマークでの日程を終えたが途中で2〜3点リードされてもすぐばん回できる力のついていること、個々のテクニックも一戦ごとに力強さをましているのはたのもしい。（村田）

## 西ドイツ

### ハンブルグから初勝利

遠征第4戦は2月20日ハンブルグのスポーツホールで地元リーグ選抜車と行った。

日本 13（7―5、6―7）12 ハンブルグ選抜

| | 【ハンブルグ】 | 得 | 【日本】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| GK | コペルケ | 0 | 下里 | 0 |
| GK | レフラー | 0 | 本田 | 0 |
| FP | ビット | 0 | 野田 | 2 |
| FP | ダンゲ | 1 | 中井 | 0 |
| FP | ライヒ | 1 | 近森 | 2 |
| FP | ハイデン | 2 | 木野 | 2 |
| FP | ニーマイア | 0 | 東 | 2 |
| FP | ロバース | 2 | 竹野 | 0 |
| FP | バーグ | 1 | 藤中 | 0 |
| FP | エッケンシタイン | 1 | 早川 | 0 |
| FP | グルーン | 1 | 近藤 | 1 |
| FP | コスタイン | 2 | 飯田 | 2 |
| | | 12 | | 13 |

▼その他の出場者【ハンブルグ】FP、テスロフ（得1）【日本】FP斎藤（得0）江名（得2）

【後記】ハンブルグ選抜は一昨年来日したメンバーのうちエントリーされているのはイーバスとメンダッハの二人だけ。がらりと顔ぶれが変った。新鋭選手が多い。

日本は前半15分5―2としたがその後は思うように点がとれない

ポスト、サイドとゆさぶるのだがシュートが単調。後半はいっそうデキが悪くミスを連続したが17分12―8とリードした余裕があり24分には1点差に詰められたが逃げ切った。

遠征初勝利とはいえ、全般的に動きが鈍く〝会心〟には程遠い。特にノーマークシュートを落とした.ことや、7MT（2回）の失敗などは大きく、これらが決まっていれば楽に勝てたと思う。（竹野）

### チェコ選手が偵察

遠征第5戦は2月22日ブラウンシュバイクで警察クラブと行った。（観衆千五百）

日本 24（11―13、13―9）22 ブラウンシュバイク警察（HVN）

| | 【HVN】 | 得 | 【日本】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| GK | ウイフトル | 0 | 本田 | 0 |
| GK | ウェセッヘ | 0 | 下里 | 0 |
| FP | ソレンビジイ | 8 | 近藤 | 1 |
| FP | クローネル | 1 | 江名 | 2 |
| FP | グレゴール | 0 | 近森 | 3 |
| FP | クブウゼ | 1 | 斎藤 | 1 |
| FP | ゲッセンメイヤー | 2 | 藤中 | 1 |
| FP | イエールマン | 2 | 東 | 7 |
| FP | フエイフィエル | 0 | 木野 | 2 |
| FP | モムルゲー | 2 | 中井 | 1 |
| FP | ヘイトマール | 5 | 竹野 | 2 |
| FP | プフイリップ | 0 | 早川 | 3 |
| | | 22 | | 24 |

▼その他の出場者FP飯田（得1）

【後記】チェコのトレーナー・ケニッヒ氏とその主力マレス選手が観戦に来た。世界選手権のための〝偵察〟である。日本もいよいよ本大会まで5日、調整を目的にのぞんだ。防御面では特にポストプレーに対するマークが固まった。攻撃は速攻のリズムにもう一つが物足りなさがあるが、タイミングはよくなった。シュートも動きにつながり、変化もついて来た。

チェコの偵察は、本番近しの緊迫を伝え、われわれも意欲がいちだんと燃えあがって来た（村田）

## デンマーク球界の実情

○…ハンドボール発祥の国を自負するデンマーク。体育館はすべてハンドボール用に細長く設計され、40万人のハンドボール競技者をもつといわれる。正式ライセンス（協会登録者）の数は男子7万、女子4万。

ハンドボール協会の年間予算は邦貨約五千万円。日本協会の5倍で、その半分は国の体育協会。残りは登録・加盟金のほか国内の有料試合の10%を納入させており、国際試合の収益はすべて協会に入るそうだ。

○…日本チームが訪れた時は国内Aリーグ（1部）の最終週だったが、選手権のシステムは男子がA、B、Cの3クラス。ABリーグは10チーム総当り、Cリーグは東地区10、西地区10に分けられている。女子はA10、Bが東西各10のリーグ戦。年2回のリーグというからいわゆる2回戦方式1回戦を10〜12月、2回戦を1〜3月に行う。Aリーグの場合1チーム18試合のわけだ。HG・コペンハーゲン・KFUM・オーハス（第2戦で対戦＝別掲）、IF・ヘルシンガー、スタディオン・コペンハーゲンらが名門としてつねに激しい優勝争いをしているようだ。

○…ジュニアの試合も盛んで国内を6地区に分けてそれぞれリーグを組織、各地区のチャンピオンなど16〜20チームで選手権を争う。

トップレベルは前回の準優勝、今回の4位と世界最上位にあり一九七二年の冬訪日の意向を示している。女子はBクラスらしい。

男女とも国際交流は実に活発で、1〜3月に国内リーグと併行して対戦。ちなみに今シーズン世界選手権前までの国際試合の成績は7勝7敗3分であった。【村田弘】

# 余裕のぞかせ3連勝

## オランダ

遠征第12戦（帰途第1戦）は3月10日オランダのヘーレンで、オランダナショナルと行った（観衆二千）

日本 18（6−11、12−6）17 オランダ

| | 【オランダ】 | 得 | 【日本】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| GK | ヴァンノーゼル | 0 | 本田 | 0 |
| GK | ノルバルト | 0 | 下里 | 0 |
| FP | ケイゼール | 3 | 飯田 | 3 |
| FP | ヤンソン | 0 | 斎藤 | 1 |
| FP | ムイレス | 2 | 近森 | 2 |
| FP | エレンバース | 1 | 東 | 3 |
| FP | カンテルバーグ | 5 | 江名 | 1 |
| FP | キビト | 4 | 野田 | 2 |
| FP | イエンシ | 1 | 木野 | 4 |
| FP | シュリック | 0 | 早川 | 0 |
| FP | リンデット | 1 | 中井 | 1 |
| FP | ブデイング | 0 | 藤中 | 0 |

18（1）7MT（1）17

▼その他の出場者【オランダ】FPソンダート、ノルバート、メールショール（いずれも得0）【日本】FP近藤（得1）、竹野（得0）

〇……オランダは今回の世界選手権には出場できなかった。しかし予選で西ドイツに1分1敗の成績をおさめたことは関係者に高く評価されている。10位の日本に善戦して自分たちの〃地位〃をはっきりさせたいところだ。

平均身長一八三、3名のサウスポーが主力。立ちあがり日本は相手のでかたをうかがいながら進行4日間実戦から遠ざかっていたため攻防の歯車がちょっと狂っていたが10分を過ぎてから攻撃のフォロープレーがよく速攻にも調子がでた。

防禦もピストンがきいて順調にリード。後半、気のゆるみからオランダの積極戦法に追いこまれ28分には1点差とされたが焦ることなく逃げこんだ。苦戦の因は帰陣の遅さにあった。今後の課題といえる。（村田）

## オランダの若手をかわす

遠征第13戦・オランダナショナルBとの試合は3月11日エデで行われた（観衆七百）

日本 23（13−9、10−8）17 オランダナショナルB

| | 【日本】 | 得 |
|---|---|---|
| GK | 本田 | 0 |
| GK | 下里 | 0 |
| FP | 東 | 1 |
| FP | 木野 | 2 |
| FP | 早川 | 3 |
| FP | 斎藤 | 2 |
| FP | 中井 | 4 |
| FP | 飯田 | 5 |
| FP | 近森 | 0 |
| FP | 藤中 | 1 |
| FP | 江名 | 2 |
| FP | 近藤 | 3 |

7MT（1）23

▼その他の出場者　FP野田（得0）、竹野（得0）

※相手メンバー不明

【後記】前夜のレセプションが夜中の一時すぎまでかかり、今日の試合地までは3時間バスにゆられるという日程。しかし悪い条件のもとでも戦える訓練もナショナルチームとしては練習の一つだ。

相手チームは若手中心でボールのキープ力はなかなか、波に乗らせる前に先制する策戦でスタート素早いボール廻しで相手のペースを乱し速攻も巧く決まった。

防禦面でもフォローがリズムにのって相手を寄せつけず、わずかにローリングオフェンスから左腕を活かした長身選手のジャンプショットで失点するにとどめた。

疲れ切っているとはいえ、そうした条件下で欧州のナショナルチームに勝てるだけのたくましさが芽生えて来たのは頼母しい（村田）

## ナショナルから2勝目

遠征第14戦はオランダナショナルとの2回戦として3月12日ヒルバーサムで行われた（観衆千五百）

日本 23（12−6、11−9）15 オランダ

| | 【オランダ】 | 得 | 【日本】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| GK | ヴィンノーゼル | 0 | 下里 | 0 |
| GK | ノルバルト | 0 | 本田 | 0 |
| FP | カンテルバーグ | 1 | 野田 | 4 |
| FP | ケイゼール | 4 | 江名 | 0 |
| FP | ムイレス | 2 | 近藤 | 2 |
| FP | シュリック | 1 | 木野 | 5 |
| FP | エレンバース | 0 | 近森 | 7 |
| FP | ブデイング | 0 | 飯田 | 2 |
| FP | メールショール | 2 | 早川 | 1 |
| FP | リンダー | 1 | 東 | 1 |
| FP | イエンシ | 3 | 藤中 | 1 |
| FP | ゲシール | 1 | 中井 | 0 |

23（1）7MT（2）15

## オランダのハンドボール

オランダでハンドボールが行われたのは45年前。日本と同じように11人制が主体でその球史をつづって来たが、協会が組織されたのは意外に遅く一九四二年（昭17）。

競技人口は現在五万五千、興味をひくのは女子がその六割を占めていることだ。年少層への普及に力を入れており、その成果として18才以下の登録者が三万人近い。一九六七年（昭42）ヨーロッパ・ユース大会を主催し13ケ国を集めるなどその活動も国際的である。

協会の年間予算は邦貨五千二百万円。体協から二千万、国から千八百万、そのほかはクラブからの登録料でまかなう。協会には8人の事務員がおり組織を円滑に動かしている。事務員の給料（年間一人百十万）など協会の事務経費が予算の五割にあたる。【村田弘】

【後記】互いに2試合目とあって手の内が判っており気分的に楽だった。

オランダの雪じょくの意気はすさまじいばかりで激しい斗志でぶつかってきた。

日本も第一戦に苦しめられた左腕のジャンプシュートをマーク、その選手への詰め、フォローそれに相手の速攻に対して早い帰陣をすることをテーマにした。

考えてみれば、全日本の最大課題である〃防禦〃は3年前の世界選手権を終った時点から今日にいたるまで、我々に常につきまとっている〃宿命〃みたいなものになってしまった。

しかし、今回の経験からいっても「よい防禦のあるところによい攻撃がある」ことはまちがいない。

試合は、館内が暗く、そのためにGKとディフェンスのタイミングが合わず前半20分までは相手の先行を許した。

しかし、時間がたつにつれGKの好捕から反撃のチャンスをつかみ早いパスワークからブロック（ヘパラバン）シュートでポイントを返した。

後半はいっそう調子があがり速攻を連続、安定したゲームで観衆を沸かせた。

幸いにも2勝をあげることができたがオランダのリズミカルなローリングオフェンスは鮮やかで日本チームも是非身につけたいテクニックであった。（村田）

**お詫び**　本誌前号（73号）1頁世界選手権速報のうち、9位決定リーグにポーランドが進出するように報じましたがアイスランドの誤りでした。

## イタリアにも大勝

ローマに移っての遠征第15戦は3月14日イタリアナショナルと行った。（観衆三千）

# イ タ リ ア

日本 33（14—8, 19—5）13 イタリア

| | 【日本】 | 得 | 【イタリア】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| GK | 本田 | 0 | シルビア | 0 |
| GK | 下里 | 0 | アルバエラ | 0 |
| FP | 飯田 | 1 | シラドリ | 4 |
| FP | 中井 | 3 | ランギアーノ | 3 |
| FP | 野田 | 2 | ルブシアーニ | 0 |
| FP | 近藤 | 2 | ストフカート | 1 |
| FP | 木野 | 3 | フェルラクティ | 2 |
| FP | 東 | 5 | レンチィーニ | 0 |
| FP | 藤中 | 4 | グバノッタ | 2 |
| FP | 近森 | 2 | デンゲリー | 0 |
| FP | 斎藤 | 7 | ロカスチーオ | 1 |
| FP | 江名 | 0 | | |
| | 33 | （0） | 7MT | （0） 13 |

▼その他の出場者　FP早川（得4）、竹野（得0）

【後記】イタリアのハンドボールはまだ歴史が浅い。4年前からはじめ競技人口は二〜三千。イタリア中央部を中心に有力クラブは15だそうだ。学校体育として普及の途上である。

ナショナルチームは24才以下の新進が主力。会場はローマオリンピックでバスケットボールに使用された体育館。36M×19Mとコートがせまい上に暗い。

イタリア協会の計画ではあと5年かけて競技人口を伸ばし、10年後にはヨーロッパのトップレベルに近づけたいという。ルーマニアからコーチを招く話も進み強豪各国と近接した条件などを考えればその可能性も充分だが、この試合では日本に比べて体力、体格もおとり技術的にも見るべきものは少かった。（村田）

## 荒っぽいイスラエル

遠征第16戦は9年ぶりにイスラエルを訪問、3月16日テルアビブでイスラエルナショナルと行った。（観衆二千）

# イ ス ラ エ ル

日本 10（5—3, 5—7）10 イスラエル・ナショナル

| | 【日本】 | 得 | 【イスラエル】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| GK | 下里 | 0 | ダニー | 0 |
| GK | 本田 | 0 | セラ | 0 |
| FP | 近森 | 1 | モーシェ | 0 |
| FP | 野田 | 0 | マルコビシュ | 4 |
| FP | 木野 | 3 | テロール | 0 |
| FP | 東 | 0 | エゴール | 0 |
| FP | 江名 | 0 | アリベオラ | 1 |
| FP | 近藤 | 5 | アキバ | 3 |
| FP | 飯田 | 1 | ネゼム | 2 |
| FP | 中井 | 0 | ヴイクトール | 0 |
| FP | 早川 | 0 | ドロリイ | 0 |
| FP | 斎藤 | 0 | ヒーム | 0 |
| | 10 | （2） | 7MT | （0） 10 |

▼その他の出場者【イスラエル】FPヤコブ（得0）【日本】FP藤中、竹野（いずれも得0）

【後記】審判の判定が全く公正を欠いて後味の悪い試合だった。10位日本に一矢をむくいようとするイスラエルの斗志はすごく、それが昂じて粗暴にさえ化していた。

前半、相手の中央攻撃に対しカットから独走の好機をしばしばつかんだが、コートがセメント製で走りにくくフォローがない。セットからの攻撃も荒い守りに封じこまれ、しかもGKダニーが好守を見せたため、日本は最低の得点に終った。終盤逃げこみを企るイスラエルは徹底したスローペース（ストーリング）。後半22分以後、日本は2回しかボールを持たなかった。

それにしても審判員のルーズなジャッジングはひどい。日本のクイックプレーはほとんど笛で寸断され、反則の基準も相手と日本ではまったく違うといった具合だ。

しかし、どのような条件下、どのような事態がおきても国際試合は勝たねばならない。イスラエルのラフプレーもアンフェアな判定も〝教訓〟なのである。（村田）

## 遠征最終戦圧勝で飾る

遠征第17戦（最終戦）は3月18日セタル・ジョーサでイスラエルナショナルとの2回戦として行われた（観衆千五百）

日本 17（13—2, 4—4）6 イスラエル・ナショナル

| | 【日本】 | 得 | 【イスラエル】 | 得 |
|---|---|---|---|---|
| GK | 本田 | 0 | セラ | 0 |
| GK | 下里 | 0 | ダニー | 0 |
| FP | 木野 | 6 | モーシェ | 2 |
| FP | 斎藤 | 1 | マルコビシュ | 1 |
| FP | 近藤 | 0 | テロール | 0 |
| FP | 近森 | 4 | エゴール | 1 |
| FP | 東 | 0 | ヒムー | 0 |
| FP | 野田 | 2 | アリベオラ | 0 |
| FP | 早川 | 2 | アキバ | 1 |
| FP | 中井 | 0 | ヤコブ | 0 |
| FP | 江名 | 1 | ネゼム | 1 |
| FP | 飯田 | 1 | ヴイクトール | 0 |
| | 17 | （0） | 7MT | （0） 6 |

▼その他の出場者FP藤中、竹野（いずれも得0）

【後記】相手の手の内、審判の進行ぶりなど判っているハズだったが前半はまたしてもイスラエルのペースへ乗せられた。しかし後半は相手の攻撃ミスとパス・カットから速攻を連発、守っても組織力のあるプレーでイスラエルの攻撃をふいせだ。

スローペースで攻めこんでくるチームには日本は先行しないかぎりペースを握れず苦戦する癖（くせ）があるようだ。今後の参考にしたい。

会場はテルアビブからバスで6時間の農村都市。試合前に雨が降りセメントコートが水びたしになるというなかでの最終戦だった。

世界選手権をふくめると6ケ国を転戦、11ケ国と対戦したわけだがそれぞれタイプがまったく違う相手だった。いずれの試合でも日本のたくましさをかなり発揮できるようになったのは収獲である。（村田）

## 台湾で模範試合

全日本チームは3月22日午後、タイペイに立ちより模範試合（紅白戦と練習）を公開した。台湾（中国）協会主催によるもので盛況だった＝詳報次号

## イスラエルのハンドボール

7人制に一本化されたのは10年前のこと。協会組織ができて15年にしかならぬが現在全国男子二百クラブ四千人、女子二〇クラブ四百人が登録されている。18才以下は未登録だが約四千五百人の競技者がいるという。

公式の広さをもつコートはすべてセメント製だ。国内選手権は地方リーグの首位が12チーム集って争われる。

ヨーロッパ各国との交流を積極的に行うよう前向きの姿勢でおりやがては侮りがたい存在となろう。国際公認審判員が6名いるのも特筆される。一部に伝えられるアジア地区への転籍は日本、韓国などとの距離や経済的事情などで今のところ考えられてはいない感じである。

【村田弘】

# どうなる
# オリンピック出場
## ～日本の推せん確定の報も～

国際ハンドボール連盟（IHF）は3月7日夜、パリで技術委員会を開いた。

世界選手権の技術的な諸問題といろのが議題といわれたが、明きらかに「オリンピック出場に関する予備会議」（村田全日本監督の話）で、田村団長（日本協会々長）村田監督らの得た情報によると大要次のような申し合せを行った模様である。

一、ミュンヘン・オリンピックのハンドボールは男子16ケ国で実施

一、公約どおり、今回の世界選手権上位8ケ国（ルーマニア、東ドイツ、ユーゴ、デンマーク、西ドイツ、スウェーデン、チェコ、ハンガリー）に出場権を与える。

一、残りの8ケ国のワクは予選を行って決める。

イ、日本をアジア地域代表として推せん

ロ、アメリカ、カナダ、アイスランドの3ケ国で予選を行い勝者に出場権を与える。

ハ、残りの6ケ国のワクはヨーロッパ・アフリカ地域で予選を行う。

### 16ケ国なら出場確実

これらの案は8月ストックフォルムにIHF技術委員会を招集して確認、その場で『原案』として成文化し、さらに9月プラハで開かれる第13回IHF総会にかけて承認へもっていく意向のようだ。

田村会長は「パリでの申し合せが修正されることは考えられまい」と語っており、日本の推せん出場は確定的とみてよい。

しかし、3月31日現在、IHFは上位8ケ国に対する出場権をも含めて、なにひとつオリンピックに関する発表を行っていない。

それというのも、いまだに肝心のミュンヘンにおけるハンドボール競技が何ケ国で実施されるか明きらかにされていないためだ。

本誌でも再三伝えられているように、今のところ「男子16ケ国」が有力だが、ブランデージ国際オリンピック委員会（IOC）会長の提唱する「球技8ケ国案」がカゲをひそめたわけではない。

それがミュンヘンから適用されるのかどうかは5月アムステルダムで開かれる第69回IOC総会で最終決定されるが、それまではIHFとしてもうかつな発表はできないのである。

日本の出場確定的というのも「16ケ国で行えば」の大前提が必要なのだ。

### 横たわる国内外の課題

〝朗報〟を手ばなしで喜べぬ課題は他にもある。

どちらかといえば今回の選手権出場国を有利に取り扱った前記の案を他の加盟国が無条件にのむかどうか。

今大会の前にも「予選方法が地域を無視した」とモロッコが強硬に抗議、ポーランドとの予選を棄権したような事態（本誌70号参照）が起きておりいっそう懸念される。

日本の推せん根拠が「アジア」にあるのか「10位」におかれたのかも詳らかではない。

「10位」ならば問題はなかろうが「アジア」であった場合、韓国との関連、イスラエルら西アジア地区諸国の動向が注目されよう。

田村会長ははっきり『〝10位〟が認められてのこと』といっている。

日本国内のミュンヘンへの態勢も現時点では明きらかにされてい




（写真）日本―チェコ戦。日本の攻守は欧州関係者の目を見はらせた

ない。

3月24日付の報知新聞（東京）に報じられた日本オリンピック委員会（JOC）青木半治委員長の見解は『ミュンヘンオリンピックには全種目参加するかどうかも決まっていないのでハッキリしたことはいまはいえない。だがメキシコ大会での〝国内選考基準〟がある程度参考になろう。とすれば国際連盟の参加資格を得たハンドボールは国内でもある程度有資格者といえよう』。

**たのもしい選手団の自信**

いずれにせよ、今回の代表チームの活躍によって、日本ハンドボール界のめざす〝ミュンヘン〟は極めて近い存在となったことは間違いない。

村田監督は『ルーマニア、東ドイツ、ソビエト以外の国なら一応どこの国とも対等以上に戦える。今後の目標はオリンピックでの上位進出。』と語っており選手団の得た自信も大きくたのもしい。

IOC総会（5月）—IF総会（9月）それにJOCの態度と斯界は一喜一憂することになりそうだが、夢の実現はもはや時間の問題といってよさそうである。

なお、女子のオリンピック採用に関しては、メキシコ大会以後2回のIOC総会で結論を得ず「保留」されたままだが、IHF自体があまり積極的でないことなどもあって実現の公算はうすい。一昨年メキシコシティで開かれたIOC総会では女子採用の場合、参加国数は男女あわせて16以内ということに決められている。（文責・編集部）

## 来秋、3国対抗実現か

**全日本、元気に帰国**

全日本チーム田村団長、村田監督ら一行16人は3月23日午後4時20分羽田着の中華航空機で帰国。

西副会長、荒川理事長ら日本協会役員のほか、会社、母校関係者が多数出迎えた。

**田村団長（日本協会々長）の話** 選手たちはまつたくよくやった。ベストエイト入りこそ逃したが、力と技のぶつかりあいの中で小さな日本選手が堂々と10位に入ったことを欧州の関係者、IHF役員は高く評価してくれた。

ミュンヘン・オリンピックが男子16ケ国で行われる場合、日本はアジア代表として推せん出場することが確定的だ。正式には8月のIHF技術委を経て11月のIHF総会で発表されるだろう。

オリンピックに備えた強化として来年9月、日本でソビエト・スウェーデンとによる「三ケ国対抗」を行う予定だ。今秋の外国チーム招待は相手の事情で難しい。

**村田監督の話** ベストエイト入りという目標を達せず残念だ。声援して下さった日本の皆さんの期待に応えられず申し訳ない。

各国の実力は予想どおりと云えたが、日本も大きな成長をとげたと思う。特に欠点とされた防禦面の強化が実ったことと、スケールの大きい攻撃が好結果を生んだ。

昨年6月の欧州遠征が選手たちに自信を植えつけていたのも見逃せない。

〝世界〟が身近かになったのは選手の努力のたまものだ。精進を重ねれば、必ず世界最上位へ進出できる。今後は国内の試合も失点を最小限にとどめるよう守備面の強化を指導し全体的なレベルアップをはかりたい。

**竹野コーチ兼選手の話** 有力国は予選リーグで1・2位どちらになったほうが決勝トーナメントを有利に戦えるか考えながら試合を進めるなど〝余祐〟があった。日本と各国の相異はいまやこの〝余祐〟の差だけといってよいのではなかろうか。

ルーマニア、東ドイツ、ソビエト、チェコあたりには苦しむだろうが、その他の上位国には充分勝算がある。実力は接近している。

ユーゴ戦の引き分けや、これまで手も足も出なかったチェコ、ソビエトに善戦できた一因としてチームワークのよかったことをあげたい。

**IHF加盟国**

【アジア地域】
日本
韓国
※台湾
※中共

【ヨーロッパ地域】
ルーマニア
東ドイツ
ユーゴ
デンマーク
西ドイツ
スウェーデン
チェコ
ハンガリー
ソビエト
アイスランド
フランス
ノルウェー
ポーランド
スイス
スペイン
オランダ
ベルギー
ブルガリア
オーストリア
ルクセンブルグ
ポルトガル
フィンランド
イタリア
△イギリス

(西アジア地区)
イスラエル
レバノン
ヨルダン
シリア
△クウェート

【アフリカ地域】
アラブ連合
チュニジア
モロッコ
アルジェリア
マリ
セネガル
ダオメ
コートジボアール
△コンゴ・ブラザビル
△コンゴ・キンシャサ
△カメルーン
△リビア
△マダガスカル
△オートボルタ

【アメリカ地域】
アメリカ
カナダ
ブラジル
アルゼンチン
※メキシコ

△印仮加盟国
※印未加盟（本誌調）

# 「全自衛隊連盟」が正式に発足　会　長・森川氏　理事長・富永氏

かねてから結成の準備を進めていた全自衛隊ハンドボール連盟が4月1日正式に発足することになり、その役員などが発表された。

それによると、会長には元自衛隊体育学校長でハンドボールに深い理解を示しつづけられていた森川竹雄陸将補を推たい。初代理事長には、自衛隊勝田（茨城）のプレーイングマネジャーとして自衛隊球界の発展に功績のあった富永劭氏（とみなが・たかし、一尉・勝田施設学校教官、日大出、現全日本実連理事、34才）が決まった。

近く、日本協会へ加盟団体としての正式手続きをとるが、自衛隊の行っているスポーツで、全自衛隊連盟組織ができるのはハンドボールが初めてのことであり、内外から多くの注目が集っている。

当分のあいだ同連盟の主事業は日本協会との共催による「全自衛隊大会」で、今年は第2回大会として6月20、21、22の3日間、東京駒沢球技場で開かれる予定。

○……役　員……○

▽会長　森川竹雄（陸将補、陸上富士学校副校長）▽副会長　千葉磨（陸将補、勝田施設学校長）、平野晃（空将補、百里第七航空団司令）、小西十郎（一等海佐、宇都宮教育航空群司令）▽理事長、富永劭▽副理事長、岡田宇三郎（海上・宇都宮教育航空群）▽理事　箭内正明（陸上・仙台）、熊原顕一（海上・下総）、桜庭和夫（航空・百里）、芦刈義人（陸上・船岡）、白坂義弘（海上・鹿屋）、堀井正洋（海上・宇都宮）平池純逸（陸上・勝田）、藤原幸介（陸上・久里浜）▽監事、森岡浩一（海上・下総第4航空群）、石橋昭一（海上・宇都宮教育航空群）

※

昨年6月駒沢で第1回全自衛隊選抜大会を〝インスタント〟に開いたのをキッカケとしてわずか10ケ月で自衛隊スポーツでは初めての全国的な競技連盟が誕生したのは隊内関係者の情熱に負うところが大きい。

自衛隊の球技としては10年前から全自衛隊大会を行っているラグビーやサッカー、それにバスケットボールなどがあるが、今回のハンドボールのような組織はまだない。最近までは全日本実連の一専門部となるかに伝えられていたが一気に独立、日本協会五つ目の加盟団体としてうぶ声をあげた。

日本協会でも自衛隊への普及には大乗り気で、今年1月、田村会長、荒川理事長が防衛庁、陸幕などを訪れたばかり。正式加盟は次の全国評議員会（開催期日未定）となるが、学連、高体連、実連、教職連とはいささか〝体質〟を異としているだけに今後も日本協会の支援は必要であろう。

# 昭和45年度登録要領を発表（5月31日〆切り）

日本協会では、このほど昭和45年度（45年4月1日〜46年3月31日）日本協会の登録要領を発表した。

それによると、本誌でも再三伝えられているようにチーム登録料が別表のように値上げとなったほか、都道府県協会登録料は「登録数11チーム以上、一万円（現行）」と「同10チーム以下・五千円（新設）」の二本建てが初めて採られる。

手続き面ではほとんど例年に変わりはないが、機関誌送付の正確を期すため用紙の一部が改正された。

日本協会へ登録するチームは各都道府県協会へ所定期日までに登録用紙3部（様式A＝1部様式B＝2部）を提出、各都道府県協会は協会長印を捺した様式Aを一括して5月31日までに規定の納入金を添えて日本協会（東京都渋谷区神南一丁目1の1、郵便番号一五〇）へ届出ることになっている。

登録〆切日をすぎたあとの受けつけは一切認められないが、新設チームはこの限りではない。また一般の個人追加登録は6月1日以降も認められるが、一人につき500円の追加料がいる。

## 国体出場資格も明確に

また、国体（注・今年度は10月10日〜15日・盛岡市）の登録については、高校男女は例年どおり「県選抜」「混成」が認められるが各種別とも今年も11名に特別規制される。競技規則どおり12名とした場合、現行の5種別72チームを5種別66チームに減らさなければならないための措置だ。このほかこれまで明確さを欠き混乱を招いていた「出場資格」のうち、前年度県予選に参加した者は、たとえ地域予選・本大会へ出場できなかった場合でも、今年度はその県以外からの出場を認めないことが明きらかにされた（ただし、新卒者を除く）。なお、体協国体委の決定により高校実習助手は教員として出場が認められる。

自衛隊チームは全国自衛隊選抜大会（6月20〜22日・駒沢）への出場は日本協会未登録でもよいが、全日本・国体などには一般チームとしての正規の登録が必要である。

45年度登録金（円）

| | 基本金 | オリンピック基金 | 機関誌（年11回分） | その他 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一般 | 二、〇〇〇 | 一〇〇 | 一、二〇〇 | 人員×一〇〇 | 三、三〇〇プラス（人員×一〇〇） |
| 大学 | 二、〇〇〇 | 一〇〇 | 一、二〇〇 | なし | 三、三〇〇 |
| 高校 | 一、〇〇〇 | 一〇〇 | 一、二〇〇 | なし | 二、三〇〇 |

# 岐阜、神戸、大阪で3試合

## 全日本男子の帰国報告試合

日本協会は第2回全日本国内サーキットとして、世界選手権に出場の全日本男子帰国報告会を兼ね次の3試合を行うと発表した。

▽第1戦（3月30日・月・18時、岐阜県営体育館）対全岐阜

▽第2戦（4月1日・水・18時、神戸中央体育館）対全兵庫

▽第3戦（4月2日・木・18時、大阪中央体育館）対全大阪

全日本男子は田村団長、村田監督ら代表16人が全員参加する。

# 望みうすの国際試合（今秋）

日本協会ではことし9月4日から24日の21日間（8試合）に予定していた国際試合の計画を白紙にもどすことに内定。ヨーロッパチーム（男子の一流国ナショナルチーム）の今秋の来日はかなり難しくなったようである。

42年9月以来とだえていた国内における国際試合の開催については、昨年10月の全国評議員会（長崎）で承認され、西ドイツを第一候補に折しようしていたが、同協会がナショナルチームの編成が難しいとしたため断念、第二候補にあげていたルーニアは来年以降デンマークも47年に来日の意向があると伝えられて正式な交渉の前にあきらめた。

しかし、オリンピックに備えて是非とも今秋ヨーロッパチームを招くべきだという声が強く、世界選手権出場の田村会長（団長）と村田選手強化対策委員長（監督）に、直接各国関係者と話し合いすることを一任した。

両氏は滞欧中「今大会のベストエイト」を基準に各国へ打診したが、いずれも世界選手権参加のために今年の予算を使いはたし来日不可能なことが判った。

日本協会では、女子または二、三の有力クラブチームになお望みをかけているが、3年ぶりの国際試合実現は残念ながら御破算の公算が強い。

国際試合開催の準備を進めていた県協会は東京、神奈川、愛知、三重、京都、大阪、福岡、熊本で近く全8試合の受け入れが確定するところだった。

日本協会では、4月6日の月例常務理事会で、この問題を協議することにしている。

## 三菱鉛筆、廃部決まる

女子実業団の最上位にある三菱鉛筆（神奈川）ハンドボール部は会社側の事情で3月31日付をもって廃部されることに決まった。

「社内の体質強化をすすめるため」というのがその理由だが、昭和40年4月部結成以来、シーズン毎に実力を引きあげ、技心ともに国内女子の代表的チームとして活躍をつづけていただけに今回の廃部を惜しむ声が強い。

## 来月、全日本審判員研修開く

昭和45年度全日本審判員研修会は5月25、26日の2日間の東京代々木の日本青少年総合センターを中心に行われる。

今年度に予定される八つの全国大会（国体を含む）の審判を担当する約百名が受講する。

# 各地の記録

## 中京ク、常盤工業降し優勝

**女子は田村紡の6連勝**

第9回東海室内選手権は2月22日名古屋の愛知県体育館に東海4県の予選勝者男女8チームが参加してトーナメントで争われた。

男子は、1回戦でクラブ同士、実業団同士が対戦、中京ク（愛知）常盤工業（岐阜）の決勝となったが中京クが前半巧く自分のペースで試合を運び、後半、常盤の追撃を振り切り優勝。（2年ぶり3度目）。

女子は、大洋紡（岐阜）、ブラザー工業（愛知）が田村紡（三重）に善戦したが、田村紡の地力が優り6連勝を飾った。田村紡はこれで3シーズン連続東海3タイトル（東海・東海実業団・東海室内）を独占。

▽男子準決勝（＝1回戦）
常盤工業（岐阜）21（11－7、10－7）14 本田技研（三重）
中京ク（愛知）20（13－6、7－7）13 清見潟ク（静岡）
▽同決勝
中京ク 17（8－5、9－10）15 常盤工業
▽女子準決勝（＝1回戦）
ブラザー工業（愛知）18（8－4、10－2）6 城北ク（静岡）
田村紡（三重）11（7－3、4－6）9 大洋紡（岐阜）
▽同決勝
田村紡 11（6－2、5－3）5 ブラザー工業

## 男子枚方、女子は大谷高勝つ

▼大阪府高校新人大会（2月・大阪）
▽男子準々決勝
枚方 12－8 堺工
寝屋川 13－10 茨木
三国丘 7（分）7 都島工
抽せんで三国丘高の勝ち
八尾 7－3 池田
▽同準決勝
枚方 7－3 寝屋川
三国丘 15－10 八尾
▽同決勝
枚方 12（7－5、5－4）9 三国丘
▽女子準々決勝
鶴見商 3（1）3 八尾
抽せんで鶴見商の勝ち
豊中 8－2 泉大津
住吉学園 10－2 初芝
大谷 15－3 枚方
▽同準決勝
豊中 6－4 鶴見商
大谷 11－3 住吉学園
▽同決勝
大谷 14（7－0、7－2）2 豊中

## 女子で小諸商強し

▼第9回長野県総合室内選手権（2月・佐久高体育館）
▽男子準々決勝
上田ク 26－11 小諸商
北農ク 19－11 本州大
長野教員 22－18 屋代高
北佐久農高 20－15 坂城高A
▽同準決勝
上田ク 15－8 北農ク
長野教員 16－10 北佐久農高
▽同決勝
上田ク 17（8－2、9－5）7 長野教員
▽女子準々決勝
小諸商高A 17－7 北佐久農A
小商ク 19－7 佐久高B
北佐久農B 22－2 上田城南高
小諸商高B 17－8 佐久高A
▽同準決勝
小諸商高A 20－6 小商ク
北佐久農B 10－4 小諸商B
▽同決勝
小諸商高A 19（10－4、9－10）14 北佐久農高B

## 追手前—高知西男女で対決

▼高知県高校新人戦（2月・高知）
▽男子準々決勝
須崎工 12－6 中村
高知西 14－5 伊野商
高知工専 11－6 弘岡農
追手前 25－3 幡多農
▽同準決勝
高知西 11－6 須崎工
追手前 22－3 高知工専
▽同3位決定戦
高知工専 14－13 須崎工
▽同決勝
追手前 15（7－4、8－1）5 高知西
▽女子準々決勝（＝1回戦3試合）
佐川 7－0 伊野商
高岡 5（分）5 山田
抽せんで高岡高の勝ち
追手前 7－2 中村
▽同準決勝
高知西 17－1 佐川
追手前 6－3 高岡
▽同3位決定戦
佐川 9－4 高岡
▽同決勝
高知西 13（8－1、5－3）4 追手前

## 春季リーグ18日に開幕 関東学連

関東学連は、このほど春季リーグ戦の日程と今年度学生役員を決め発表した。

春季リーグは、例年より早い開幕となり4月18日から5月2日までの7日間に行われる。今季から専修大（東京）が新加盟、千葉大（千葉）が11年（22シーズン）ぶりに復帰する。このため男子は1、2、3部が各8校、4部が12校となる。女子は6校の予定。

【春季リーグ戦日程】4月18、20、22、25、28、29、5月2日（25日は駒沢第二球技場、それ以外は同第一球技場）

【新委員】▽委員長 谷萩勉（日体大）▽副委員長 神田順三（関東学院大）中村芳則（中大）▽会計委員 野原文子（日体大）

---

・記・後・集・編・

世界選手権がおわり、ベスト・エイト入りは惜しくも果せませんでしたが世界に日本の実力を見せつけることができました。本誌にもある通り、世界の球界は日本の力の向上ぶりに眼をみはっています。

本号では、世界選手権を記録を主にしてとりあげ、世界選手権特集号の第一編として、みなさまにお届けします。

これは、村田臨督をはじめとする選手団のみなさんが忙しいなかを送ってくださった記録、後記が中心になっています。今回の選手団実にマメに読者のみなさんのために貴重な記録を送ってくれました。感謝します。

次号は世界選手権特集の第二編として選手・コーチの皆さんの手記などを中心にしたものを企画しています。

また団長であった田村会長の手になる多くの写真で紙面を飾るつもりにもしています。単に文章だけでなく、眼で見る世界のハンドボールを読者のみなさんにタップリ見ていただけるように企画しています。ミュンヘンをめざして新な出発を今回の選手権を回顧することからはじめそこから問題点を日本のハンドボール界の全員が考えてほしいと思います。

（T S、F）

日本ハンドボール協会編
「ハンドボール」
第七十四号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可 昭和四十五年三月二十五日印刷 昭和四十五年四月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京[illegible]区神南一ー一ー一
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円(年間購読11回・千二百円)